

財團法人八尾市文化財調査研究会報告90

- I 成法寺遺跡（第13次調査）
- II 成法寺遺跡（第15次調査）
- III 東郷遺跡（第59次調査）
- IV 東郷遺跡（第62次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



# 財團法人八尾市文化財調査研究会報告90

- I 成法寺遺跡（第13次調査）
- II 成法寺遺跡（第15次調査）
- III 東郷遺跡（第59次調査）
- IV 東郷遺跡（第62次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

大阪府の東部にある八尾市は、東に生駒山地を望み、河内平野のほぼ中央に位置しています。現在、八尾市の南方を東から西に流れる大和川は、今から約300年前の江戸時代の宝永元年(1704年)に、付け替えられたものです。付け替え以前の大和川は、奈良盆地から西へと向い、大阪府柏原市付近で、まず、石川と合流して河内平野を北へ流れ、さらに、淀川に合流し、大阪湾へと注いでいました。この河川をはじめ、河内平野には多くの河川が流れ、これらの河川により頻繁に洪水や氾濫がおこり、住民を脅かしてきました。しかしながら先人たちは水害に遭いながらも、肥沃な土壤が広がる平野を耕し、生活基盤としてきました。こうしたことから、この平野の中には、先人たちが築いてきた文化遺産が、数多く眠っています。

八尾市は、人口27万人余りを有し、大都市郊外の近代都市として発展し、近年、公共や民間による開発が多く行われております。これらの開発に伴う発掘調査が数多く行われ、その結果、旧石器時代以降、各時代にわたる人々の営みが、連續と繰り広げられた地域であることが判明しています。

この度、平成6・7・15年度に発掘調査を行ったものの内、民間事業に伴う4件の調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ報告書として刊行する運びとなりました。

本書が、地域の歴史を解明していく資料として、また、埋蔵文化財の保護・普及のための資料として活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査に、並々ならぬご協力とご理解を賜りました事業者の皆様に心より感謝を申し上げます。

平成18年3月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 前田 義秋

## 序

1. 本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会が平成6・7・15年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成18年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
  1. 本書に収録した各調査報告の文責は、西村公助で、全体の構成・編集は西村が行った。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は、東京湾標準潮位(T.P.)である。
  1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
  1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・埴輪—白・須恵器・陶磁器—黒 石器・瓦—斜線
  1. 土色については、『新版 標準土色帖』1998年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財團法人日本色彩研究所 色票監修を使用した。
  1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

## 目 次

### はしがき

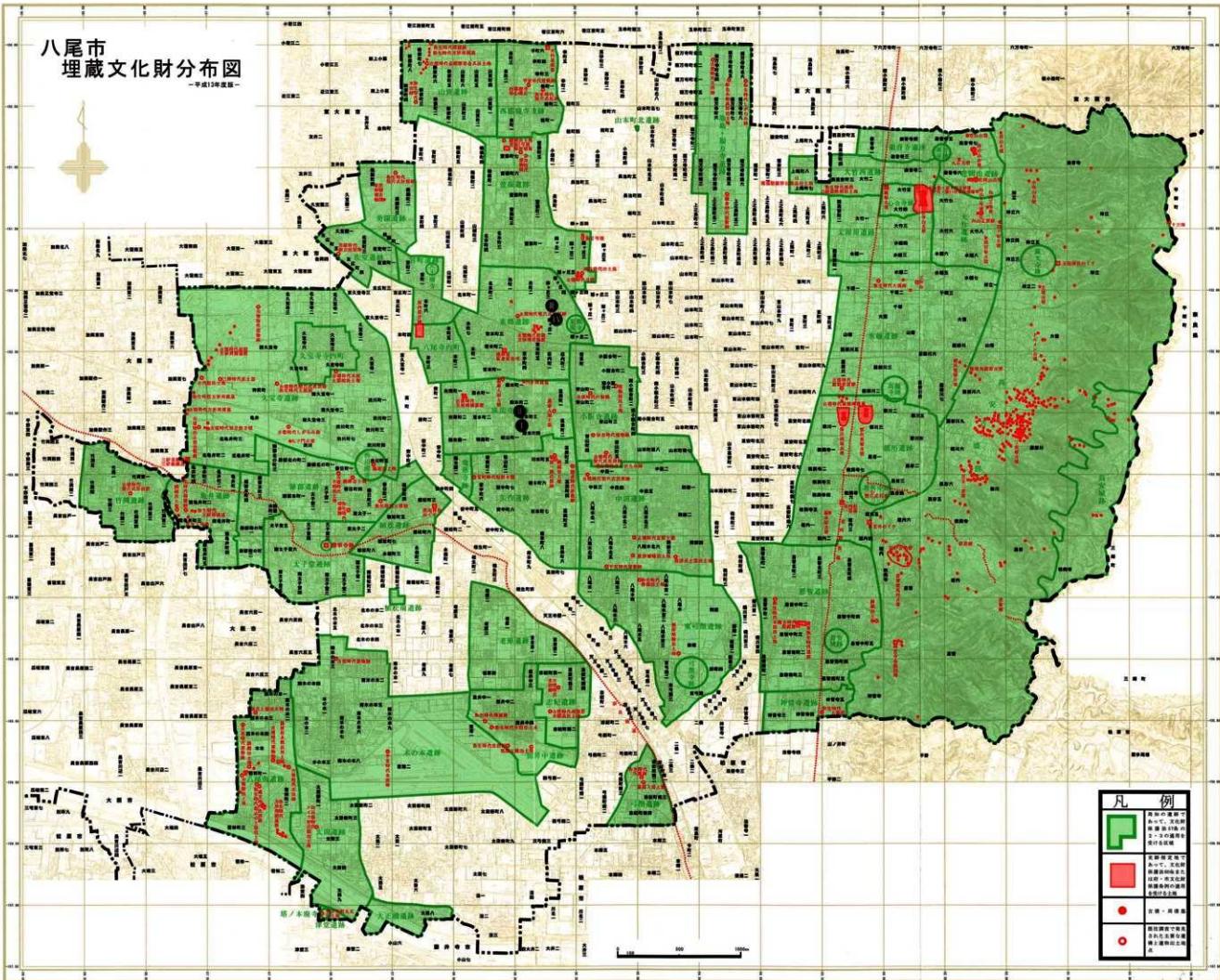
### 序

### 八尾市埋蔵文化財分布図

I 成法寺遺跡 第13次調査 (SH94-13)	1
II 成法寺遺跡 第15次調査 (SH95-15)	21
III 東郷遺跡 第59次調査 (TG2003-59)	33
IV 東郷遺跡 第62次調査 (TG2003-62)	43

報告書抄録

## 八尾市 埋蔵文化財分布図



I 成法寺遺跡第13次調査（S H94-13）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南本町3丁目31-2他で実施した社会福祉施設建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第13次調査(S H94-13)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成6年4月4日～同年4月18日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は、約210m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は中西明美・能勢尚樹・西村和子である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。  
【遺物実測】市森千恵子・國津れいこ・鈴木裕治・徳谷尚子・實樹姫美子  
【遺物トレース】徳谷  
【執筆・編集】西村

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査の方法と経過 .....	2
2) 層序 .....	2
3) 検出遺構と出土遺物 .....	3
3.まとめ .....	19

## 挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図.....	1
第2図 地区割図.....	2
第3図 第1・2区 地層断面図.....	3
第4図 第1・2区 検出遺構平面図.....	4
第5図 第1区 S K101出土遺物実測図I .....	5
第6図 第1区 S K101出土遺物実測図II .....	6
第7図 第1区 S K101・第3層出土遺物実測図 .....	7
第8図 第2区 S E101平・断面図 .....	8
第9図 第2区 S E101出土遺物実測図I .....	9
第10図 第2区 S E101出土遺物実測図II .....	10
第11図 第2区 S E101出土遺物実測図III .....	11

第12図	第2区 S K101~106出土遺物実測図	13
第13図	第2区 S K107~116出土遺物実測図	14
第14図	第2区 S P 102~104・107・109・110・112~116・118・119・121・123 SD101 ~105出土遺物実測図	17
第15図	第2区 第3層出土遺物実測図	18

## 表 目 次

第1表	成法寺遺跡調査一覧表	2
第2表	小穴(S P)法量表	16

## 図 版 目 次

図版一	第1区 全景 第1区 調査状況 第1区 SK101 第1区 SK101出土遺物 第2区 調査状況 第2区 全景 第2区 SE101 第2区 SE101断面
図版二	第1区 SK101出土遺物
図版三	第1区 SK101 第2区 SE101出土遺物
図版四	第2区 SE101 第2区 SK103 第2区 SK104出土遺物
図版五	第2区 SK106 第2区 SK112 第2区 SD101 第2区 第3層出土遺物

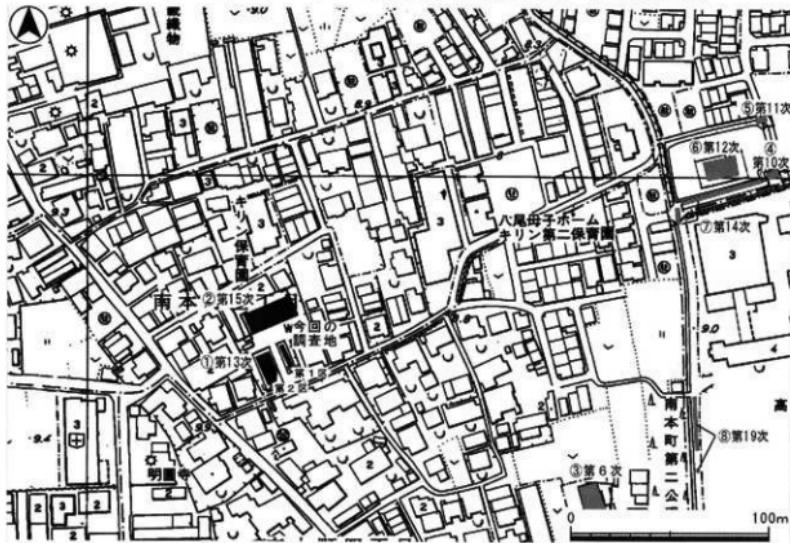
# I 成法寺遺跡第13次調査(S H94-13)

## 1. はじめに

成法寺遺跡は、河内平野の中を北または北西方向に流れている長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置している。同遺跡は八尾市の中北部に位置し、現在の行政区画では、光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園がその範囲とされている。

当遺跡内では、大阪府教育委員会(以下府教委と記載)、八尾市教育委員会(以下市教委と記載)、財團法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)が調査を実施しており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。今回調査を行った場所は八尾市南本町3丁目31-2他(第1図の①)である。

今回の調査地の周辺では、北東側約400m地点で、府教委が都市計画道路平野中高安線拡幅工事に先立つ第4次調査を行っている。この調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代前期の堅穴住居を検出している(山上1989)。北約300m地点では、同工事に先立つ府教委第6次調査を行っており、11世紀末の瓦器楕が出土する集落遺構を検出している(宮野・西川1992)。この他、同工事に先立つ一連の府教委の調査では数多くの遺構、遺物の検出があった。また、南東側約200m地点では、研究会が第6次調査(第1図③)を行っており、14世紀末から15世紀初頭にかけての遺構を検出している(原田1991)。また、東側約250m地点では、研究会が第12次調査(第1図⑥)を行っており、奈良時代の井戸の中から墨書き人面土器が出土している(坪田1994)。



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

第1表 成法寺遺跡調査一覧表

地図位置	略号	次	調査地	年度	調査原因	調査面積	調査期間
①	SH94-13	13	南本町3丁目31-2他	H06	社会福祉施設建設	210	H060404~0418
②	SH95-15	15	南本町3丁目31-2他	H07	社会福祉施設建設	425	H070405~0425
③	SH89-06	6	南本町4丁目24	H01	共同住宅建設	200	H020220~0303
④	SH92-10	10	高美町1丁目地内	H05	下水道第4工区	50	H051109~1124
⑤	SH92-11	11	高美町1丁目地内	H05	下水道第6工区	30	H051115~1122
⑥	SH93-12	12	高美町1丁目73.74	H05	共同住宅建設	180	H060301~0315
⑦	SH94-14	14	高美町2丁目地内	H06	公共下水道6-13工区	124	H061111~H070112
⑧	SH2003-19	19	高美町2丁目地内	H15	公共下水道14-108工区	35	H150519~0521

当遺跡の周辺には、同一地形上に矢作遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡が存在しており、これらの遺跡からは当遺跡と同様、弥生時代から近世に至るまでの遺構及び遺物が多数検出されている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は社会福祉施設建設に伴うもので、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第13次調査である。調査は施設建設部分を対象に約210m<sup>2</sup>を行った。調査では調査地の南西側に基準の杭(任意)を打ち、そこから、北に25m、東に20mの範囲を地区割した。地区割には南西隅から北に5m毎にアラビア数字(1~5)、東に5m毎にアルファベット(A~D)を名付けた。1A~5Dの範囲が今回の地区割である。地区割の南西隅にはX0・Y0を設け、その地点から北にX0~X25・東にY0~Y20を設定し、X・Yの交点を地点の名称とした。調査にあたっては、現地表下1.0m前後まで機械掘削を行ない、以下0.25mについては人力掘削を行なった。なお、調査箇所は2箇所あるため東側を第1区、西側を第2区とした。

### 2) 層序

調査地では、第1・2区共に普遍的に存在する5層(第0~4層)を基本層序とした。なお、第5・6層は第2区の下層調査で確認した地層である。

第0層 盛土。層厚0.4~0.7m。上面はT.P.+10.0

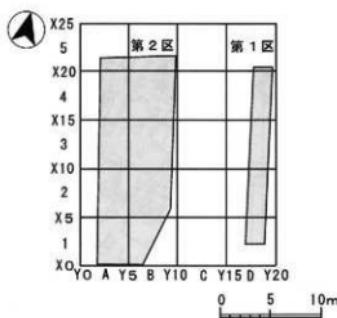
m前後を測る。

第1層 10YR3/3暗褐色粘質土。層厚0.1m。近代の耕作土。

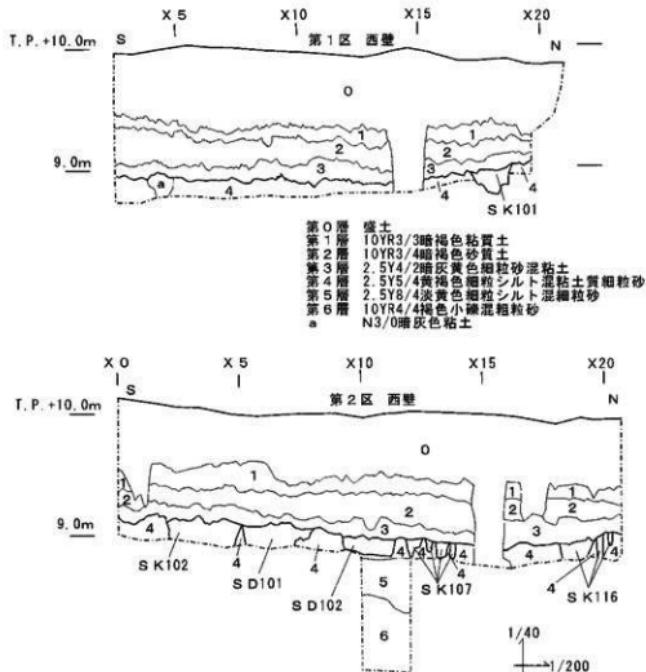
第2層 10YR3/4暗褐色砂質土。層厚0.2~0.3m。近世の遺物含む。

第3層 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土。層厚0.1~0.2m。鎌倉時代から近世の遺物含む。

第4層 2.5Y5/4黄褐色細粒シルト混粘土質細粒砂。層厚0.1~0.4m。上面はT.P.+8.9~9.1mで、鎌倉時代の遺構を検出した。



第2図 地区割図 (S=1/500)



第3図 第1・2区 地層断面図(垂直1/40 水平1/200)

第5層 2.5Y8/4淡黄色細粒シルト混粗粒砂。層厚0.3~0.4m。

第6層 10YR4/4褐色小礫混粗粒砂。層厚0.6m以上。湧き水が激しく0.6m以上掘り下げることができなかった。河川内堆積土と思われる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 第1区

現地表下約1.25m(T.P.+8.9~9.1m)前後の第4層上面で鎌倉時代の土坑1基(SK101)を検出した。

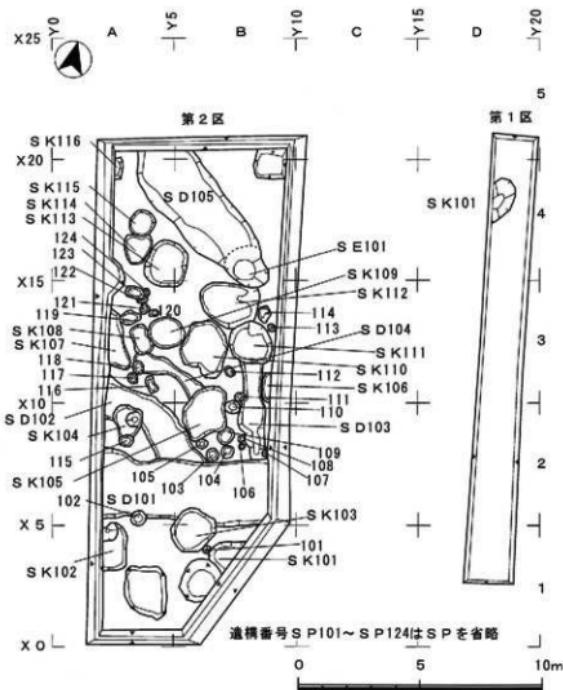
#### 土坑(SK)

##### SK101

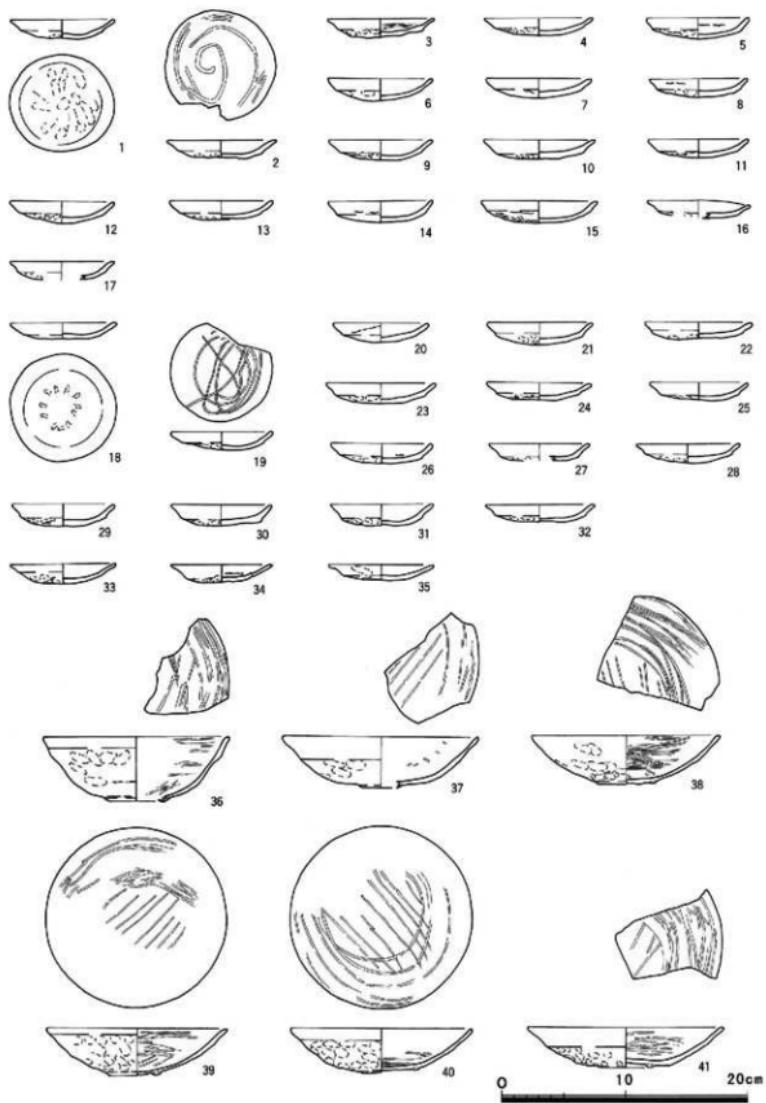
4D地区で検出した。平面の形状は橢円形で、長径1.8m・短径1.2m・深さ0.15mを測る。埋上はN4/0灰色粗粒シルト混粘土である。内部からは13世紀後半の瓦器碗・小皿・土師器小皿・須恵器鉢等が出土した。出土遺物のうち1~101を図化した。1~35は瓦器小皿である。体部から口

縁部にかけての形状により、以下の通りに分けることが可能である。1～17は折れ曲がる。18～32は段をつけ曲がる。33～35は丸みをもち曲がる。1の底面には放射状にユビナデを施す。2の内面には螺旋状暗文を施す。18の底面には円状に指先のツメ？による押えを施す。19の内面には螺旋状暗文を施すが乱れている。

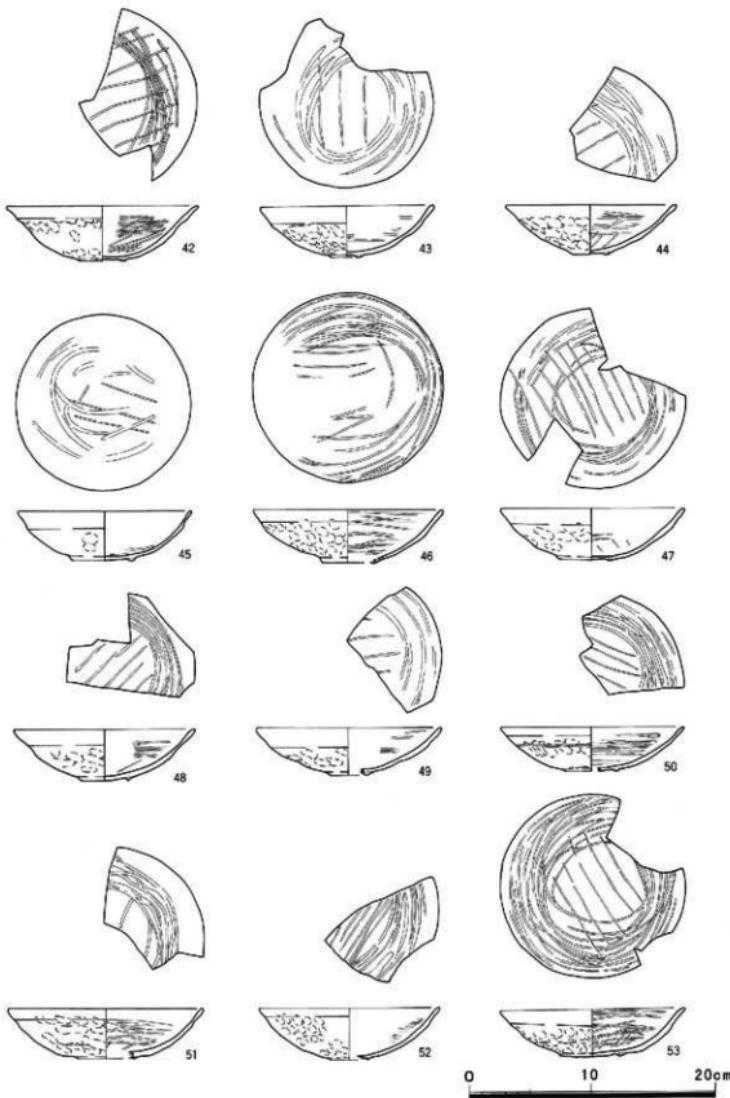
36～61は瓦器椀で、内面は横方向の磨きを施す。外面の調整はナデており、指頭圧の痕跡が見られる。高台は低く雑に取り付いている。36～58の見込みには平行線状暗文を施し、59～61は螺旋状暗文を施す。



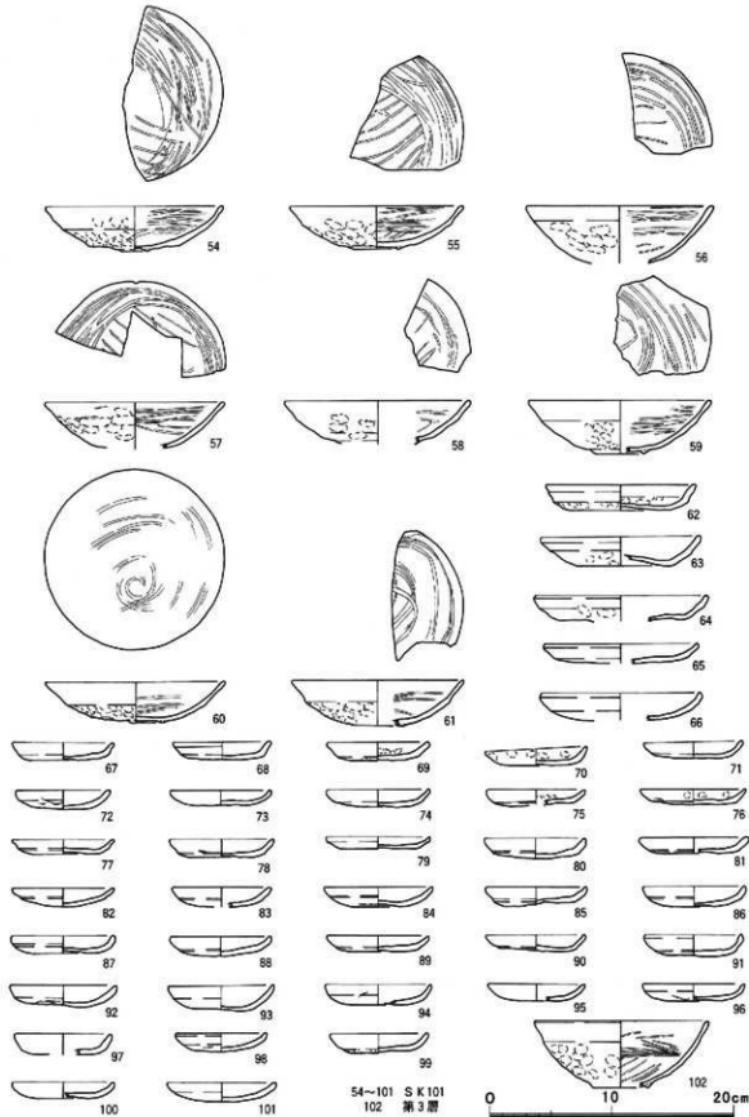
第4図 第1・2区 検出造構平面図 (S=1/200)



第5図 第1区 SK 101出土遺物実測図 I (S=1/4)



第6図 第1区 SK101出土遺物実測図Ⅱ (S=1/4)



第7図 第1区 SK 101・第3層出土遺物実測図 (S=1/4)

旋状暗文を施す。62～66は土師器中皿で、口径12～14cmを測る。内外面ともにナデを施す。67～101は土師器小皿で、口径8～9cmを測る。内外面ともにナデを施す。瓦器小皿と同様、体部から口縁部にかけての形状により、以下の通りに分けることが可能である。67～76は折れ曲がる。77～91は段をつけ曲がる。92～101は丸みをもち曲がる。遺物の時期は13世紀後半に比定できる。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第3層からは土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器が出土した。このうち図化し記載したものは瓦器楕(102)である。102は深みのある瓦器楕で、内面横方向のミガキを施し、見込みには平行線状のミガキを施す。外面はナデしており、指頭圧の痕跡が見られる。

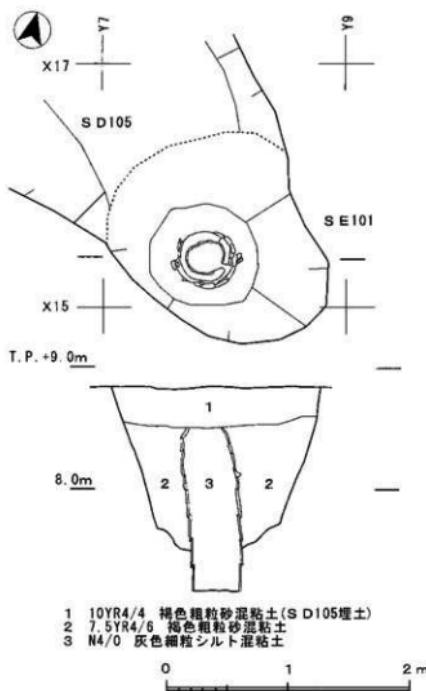
#### 第2区

現地表下約1.25m(T.P.+8.9～9.1m)前後の第4層上面で鎌倉時代から室町時代の井戸1基(S E 101)・土坑16基(S K 101～116)・小穴24個(S P 101～124)・溝5条(S D 101～105)を検出した。

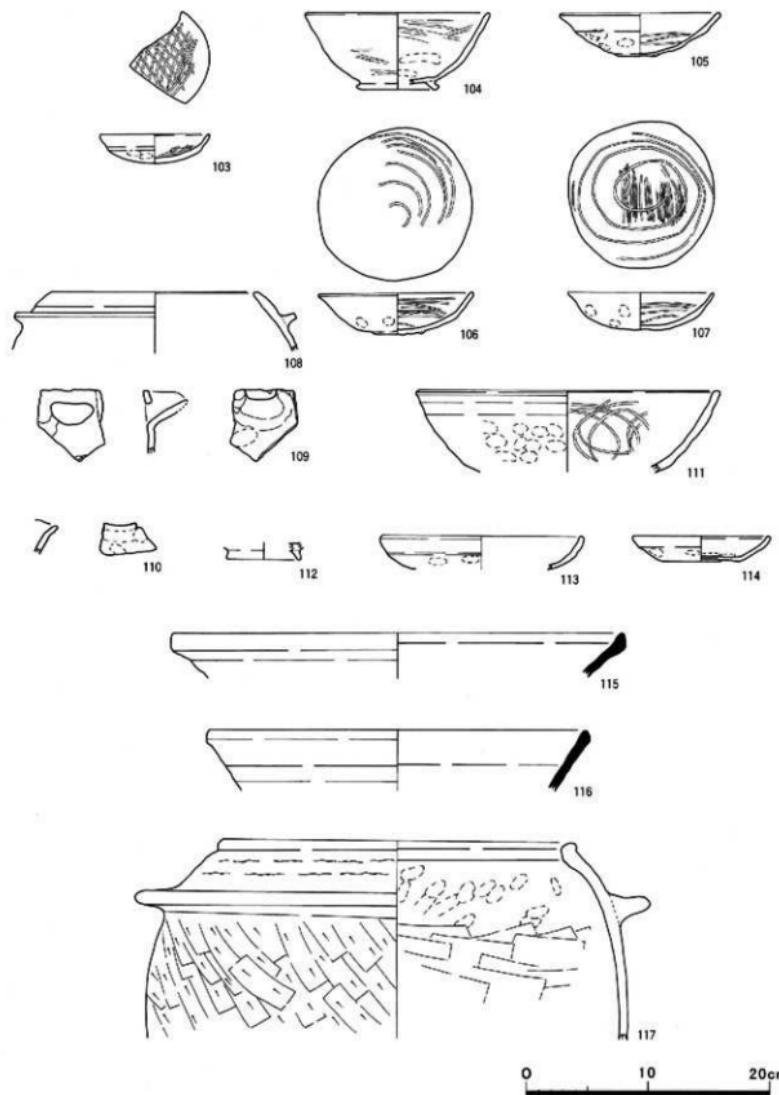
#### 井戸(S E)

##### S E 101

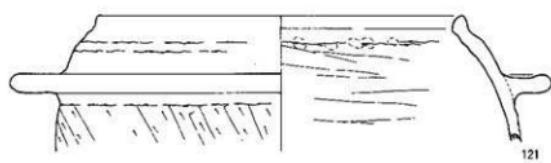
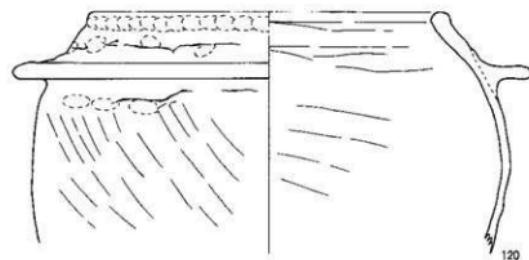
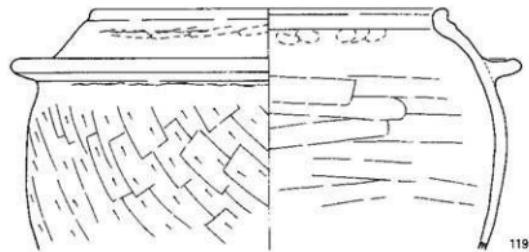
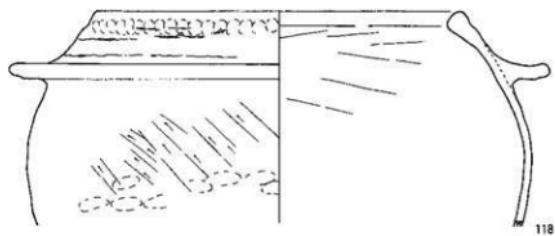
3・4B地区で検出した。掘形の平面の形状は、遺構の北側がS D 105に切られるため、不明であるが、梢円形になると思われる。長径2.0m、短径1.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ1.7mを測る。中央に曲物4段と羽釜7段を積み重ねた井戸側を設置している。埋土は井戸側内がN4/0灰色細粒シルト混粘土で、井戸側外は7.5YR4/6褐色粗粒砂混粘土である。井戸掘形からは13世紀後半の瓦器楕・小皿・土師器小皿・羽釜等が出土した。出土遺物のうち103～128を図化した。103は瓦器小皿で、見込みに格子状暗文を施す。104～107は瓦器楕である。104は内外面ミガキを施す。「ハ」の字にひらく高台が貼り付く。尾上編年(尾上1983)のI期に比定でき、11世紀後半から12世紀初めのものである。105は低い高台を雜に貼り付けている。内面横方向のミガキを施す。106は低い高台を雜に貼り付けている。見込みに螺旋状暗文を施す。107は高台が付かない。見込みに螺旋状暗文を施す。105～107は尾上編年のIV-1～2期に比定でき、13世紀中頃のものである。



第8図 第2区 S E 101平面面図 (S=1/40)

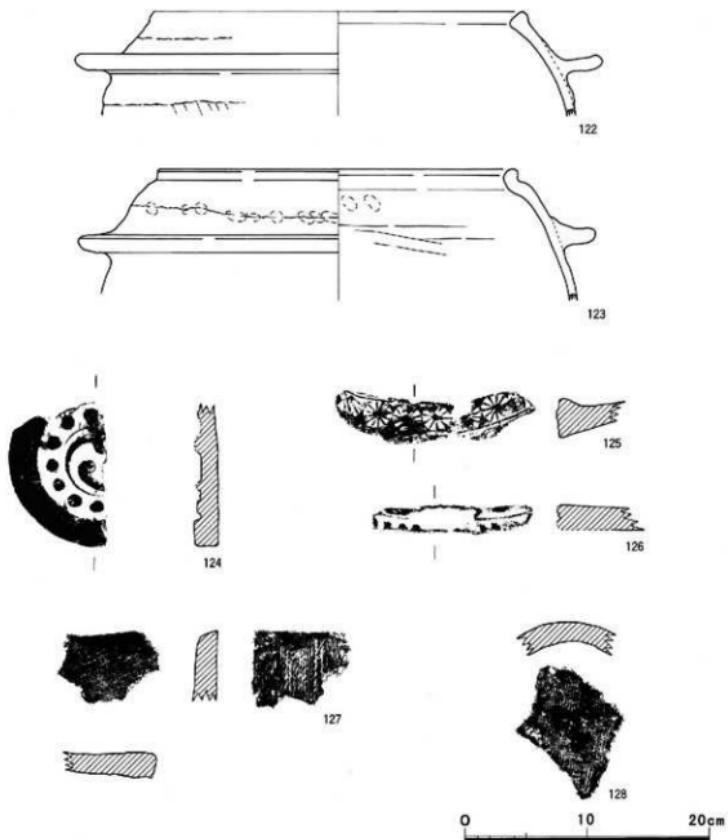


第9図 第2区 S E 101出土遺物実測図 I (S=1/4)



0 10 20cm

第10図 第2区 S E 101出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/4)



第11図 第2区 S E 101出土遺物実測図III (S=1/4)

る。108は瓦質羽釜で、短く斜め上方に伸びる鉢部から内湾して立ち上る口縁部をもつ。口縁端部は丸く終る。内外面は全体的にナデを施している。109・110は瓦質鉢である。109は口縁部付近に孔をあけ、注ぎ口が付いている。110は口縁部に注ぎ口が付いている。111は瓦質鉢で、内面に螺旋状暗文を施す。112は黒色土器椀の高台部で、内面が黒い。113・114は土器器中皿である。115・116は東播系須恵器鉢で、115の口縁端部は面をもつ。117～123は土器器羽釜で、底部を打ち欠いて井戸側に用いられている。本来は煮炊き用として使用されていた羽釜で、外面に煤が付着している。117は口縁端部に面をもち、鉢はやや上方に向かって伸びる。118は口縁端部が丸く、鉢部は水平に伸びる。119は口縁端部を外側につまみ出し丸くおわる。鉢部はやや上方に向かって伸びる。120は口縁端部が丸く、鉢部は水平に伸びる。121・122は口縁端部に面をもち、鉢はやや上方に向かって伸びる。

びる。123は口縁端部を外側につまみ出し丸くおわる。鋸部は水平に伸びる。117～123は森島縦年(森島1990)のA型式で13世紀中頃～末頃に比定できる。124は軒丸瓦で、巴文を施す。125・126は軒平瓦で、125は花弁を押捺し、126は連珠文を配す。127は平瓦で、凹面布目、凸面繩目を施す。128は丸瓦で、凹面布目を施す。

#### S K 101

1B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.5m・短径1.0m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒シルト混粘土で、土師器小皿(129)が出土した。

#### S K 102

1・2A地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.9m・短径1.0m・深さ0.5mを測る。埋土は上から10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土、N4/0灰色細粒シルト混粘土で、瓦器楢・小皿、土師器小皿、須恵器鉢等が出土した。出土遺物のうち130～133を図化した。130は瓦器楢で、内外面横方向のミガキを施す。131は瓦器楢で、内面に横方向のミガキを施す。外面はナデを施す。132・133は土師器小皿で、132は平らな体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部。端部は尖りぎみに終わる。133は内外面ともに指頭圧による凹凸が顕著に見られる。

#### S K 103

1・2A・B地区で検出した。平面の形状は円形で、径1.8m深さ0.2mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土で、瓦器楢・小皿、土師器小皿等が出土した。出土遺物のうち134～136を図化した。134は瓦質羽釜である。水平に短く伸びる鋸部から内湾する口縁部。口縁部外面には凹線を3条施す。森島縦年(森島1990)のI型式で、15世紀末頃に比定できる。135は土師器壺で、外面に左上がりのタタキを施す。136は軒平瓦で、中心に宝珠文を、左右に唐草文を表現している。

#### S K 104

2A地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.3m・短径1.2m・深さ0.2mを測る。埋土はN4/0灰色細粒シルト混粘土で、瓦質羽釜(137)が出土した。137は上方に短く伸びる鋸部が付く。

#### S K 105

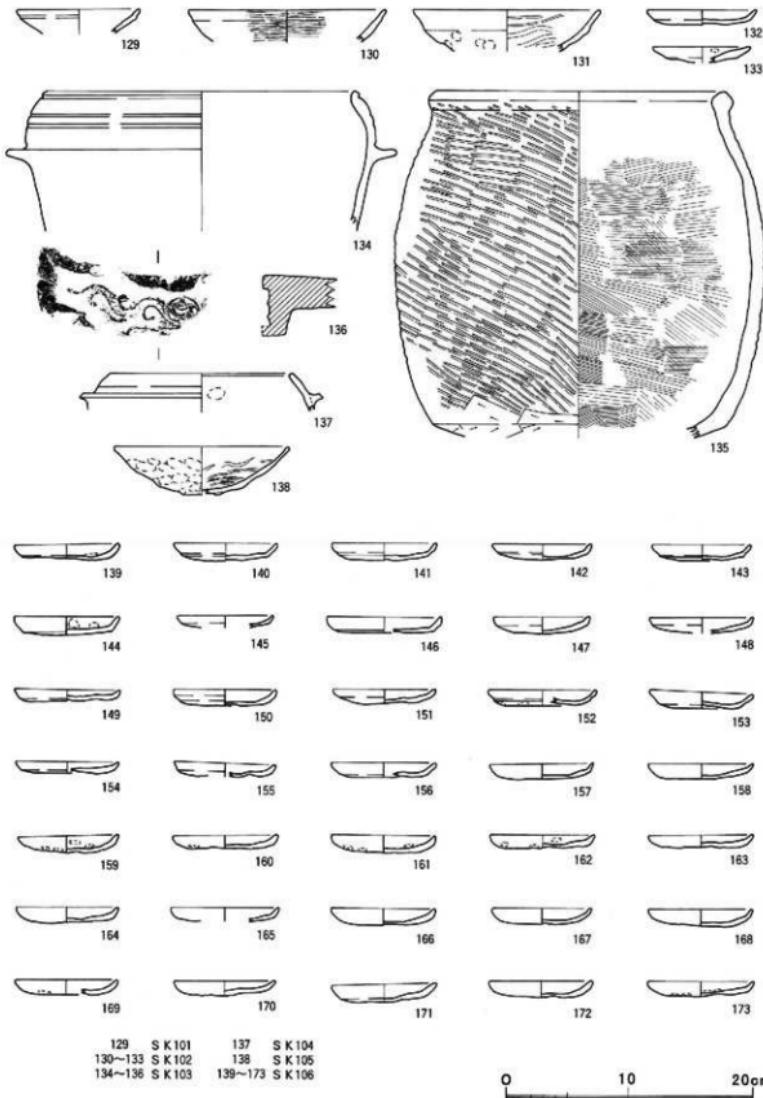
2・3B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径2.3m・短径1.7m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器楢(138)が出土した。138は内面に横方向のミガキを施す。外面はナデを施す。高台は低く雑に付く。

#### S K 106

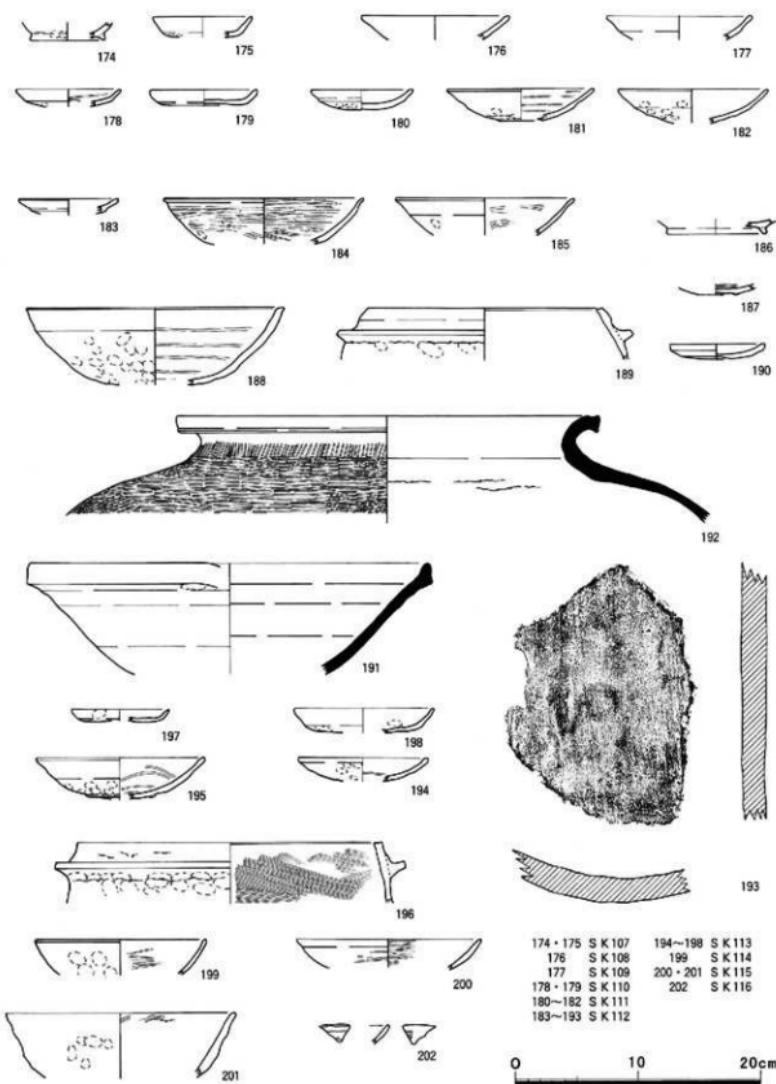
2・3B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.2m・短径0.3m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、土師器小皿(139～173)が出土した。139～173は土師器小皿で、口径8.0～9.5cmを測る。内外面ともにナデを施す。体部から口縁部にかけての形状により、折れ曲がるもの(139～166)、丸みをもち曲がるもの(167～173)に分けることが可能である。遺物の時期は、13世紀後半に比定できる。

#### S K 107

3A地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径2.4m・短径1.0m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器楢(174)・土師器小皿(175)が出土した。174は「ハ」の字にひらく高台が付く。175は平らな体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部である。



第12図 第2区 SK 101~106出土遺物実測図 (S=1/4)



第13図 第2区 S K 107～116出土遺物実測図 (S=1/4)

**S K108**

3A地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.3m・短径0.6m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器椀(176)のほか、土師器小皿等が出土した。176は内外面ともにナデを施す。

**S K109**

3A・B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.6m・短径1.3m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器椀(177)のほか、土師器小皿等が出土した。177は内外面ともにナデを施す。

**S K110**

3B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径2.5m・短径2.0m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器小皿(178)、土師器小皿(179)が出土した。178は屈曲し上外方へ伸びる口縁部である。内面にミガキを施す。179は屈曲し上外方へ伸びる口縁部である。内外面ナデを施す。

**S K111**

3B地区で検出した。平面の形状は円形で、径1.8m・深さ0.4mを測る。埋土は上からN4/0灰色粗粒砂混粘土、10YR3/3暗褐色細粒シルト混粘土で、瓦器小皿(180)、瓦器椀(181・182)が出土した。180は平らな底部から丸く曲がり上外方へ伸びる口縁部である。181は低い高台が雜に付く。内面横方向のミガキを施す。182は内外面ナデを施す。

**S K112**

3B地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径2.4m・短径1.9m・深さ0.3mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器、須恵器、瓦等が出土した。出土遺物のうち183~193を図化した。183は瓦器小皿で、内外面ナデを施す。184は瓦器椀で、内外面横方向のミガキを丁寧に施す。185は瓦器椀で、内面ナデを施す。外面はミガキを施す。186は瓦器椀で、断面台形の高台が貼り付く。187は瓦器椀で、断面三角形の高台が貼り付く。188は瓦質鉢で内面に横方向にミガキを施す。189は瓦質羽釜で、上方に向く鉢をもつ。190は土師器小皿。191は東播系須恵器鉢。192は須恵器壺で、外反する口縁部である。口縁端部は面をもつ。体部外面に縦方向のち横方向の平行タタキを施す。193は平瓦で、凹面に布目を施す。

**S K113**

3・4A・B地区で検出した。平面の形状は円形で、径1.8m・深さ0.3mを測る。埋土は上からN4/0灰色粗粒砂混粘土、10YR3/3暗褐色細粒シルト混粘土で、瓦器椀・小皿、土師器小皿等が出土した。出土遺物のうち194~198を図化した。194は瓦器小皿で、見込みに平行線状暗文を施す。195は瓦器椀で、内面にミガキを施す。196は瓦質羽釜で、水平に伸びる鉢をもつ。体部内面ハケナデ、外面ナデを施し、鉢を取り付けた時の粘土接合の痕跡が残る。197は土師器小皿で、口縁部から体部にかけて屈曲する。内外面ナデを施す。198は土師器中皿で、内外面ナデを施す。

**S K114**

4A地区で検出した。平面の形状は円形で、径1.2m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器椀(199)が出土した。199は瓦器椀で、体部内面に横方向のミガキを施す。

## S K 115

4A地区で検出した。平面の形状は円形で、径1.0m、深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器(200・201)が出土した。200は瓦器碗で、体部内外面に横方向のミガキを施す。201は瓦質鉢で、口縁部内面にはハケを施す。

## S K 116

4・5A地区で検出した。平面の形状は梢円形で、長径0.9m、短径0.4m・深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器(202)が出土した。202は瓦器碗で、体部内面に横方向のミガキを施す。

## 小穴(S P)

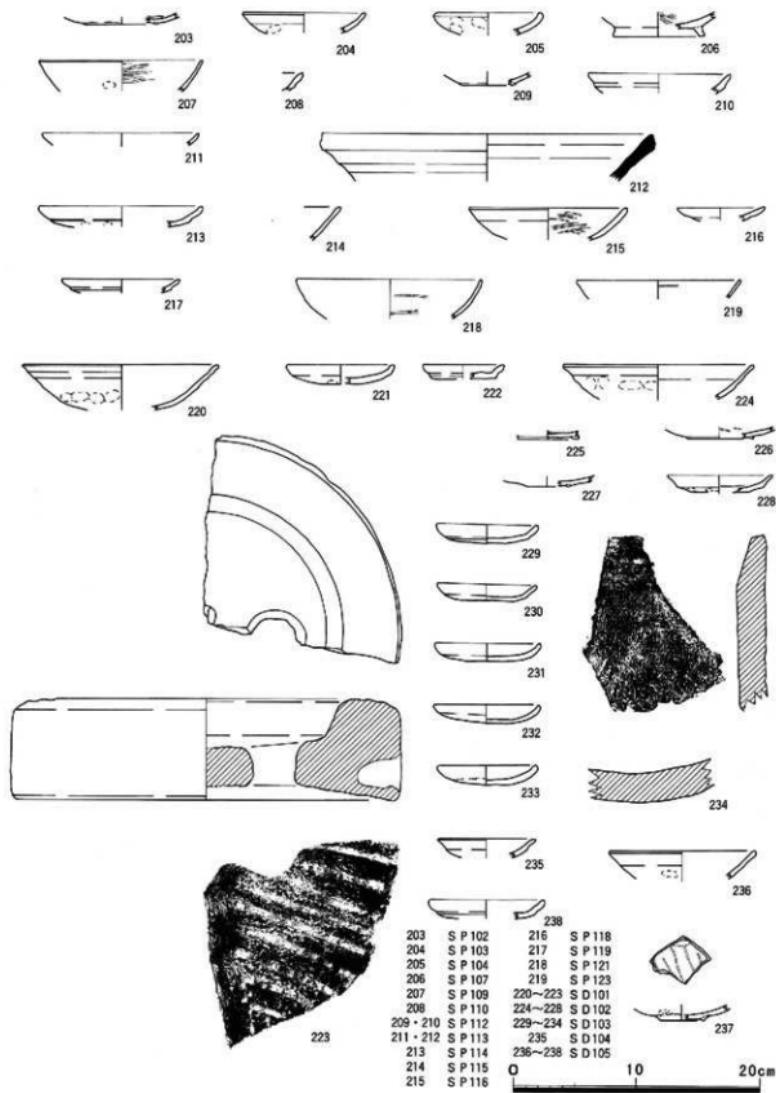
## S P 101~124

第2区全域で検出した。平面の形状は、円形・梢円形である。径0.2~0.9m・深さ0.1~0.2mを測る。埋土はN4/0灰色細粒シルト混粘土で、S P 102からは203が、S P 103からは204が、S P 104からは205が、S P 107からは206が、S P 109からは207が、S P 110からは208が、S P 112からは209・210が、S P 113からは211・212が、S P 114からは213が、S P 115からは214が、S P 116からは215が、S P 118からは216が、S P 119からは217が、S P 121からは218が、S P 123からは219が出土した。203は瓦器碗の高台部で、低い逆台形の高台が雑に貼り付く。内面に暗文を施す。204は瓦器小皿で、内外面ともにナデ。205は土師器小皿で、内外面ともにナデを施し、外側に指頭圧痕が残る。206は瓦器碗の高台部で、逆台形の高台が貼り付く。内面にミガキを施す。207は瓦器碗で、内面に横方向のミガキを施す。208は土師器小皿。209は瓦器碗の高台部で、低い逆台形の高台が雑に貼り付く。210は土師器小皿で、口縁部から体部にかけて段をつけ屈曲する。211は瓦器碗。212は東播系須恵器鉢。213は土師器中皿。214は瓦器碗。215は瓦器碗で、内面に横方向のミガキを施す。216・217は土師器小皿。218・219は瓦器碗で、内面に横方向のミガキを施す。

第2表 小穴(S P)法量表

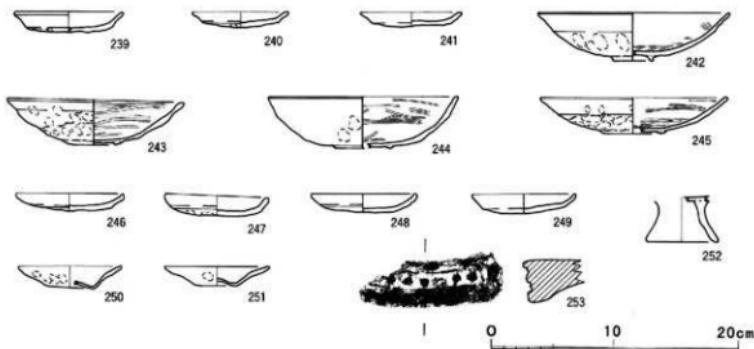
遺構番号	地区	平面形状	径	長径	短径	深さ	堆積土	出土遺物
S P 101	1B	円	0.3		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 102	1・2A	円	0.6		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・瓦	
S P 103	2B	円	0.5		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 104	2B	円	0.5		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・上師器・須恵器	
S P 105	2B	円	0.4		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 106	2B	円	0.3		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 107	2B	円	0.2		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 108	2B	円	0.3		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 109	2B	円	0.7		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 110	2・3B	円	0.6		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 111	3B	円	0.5		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 112	3B	円	0.4		0.2	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 113	3B	円	0.3		0.2	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器・須恵器	
S P 114	3B	南北方向に長い楕円	0.7	0.5	0.2	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器・須恵器	
S P 115	2A	円	0.5		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・須恵器	
S P 116	3A	南北方向に長い楕円	0.7	0.3	0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 117	3A	円	0.4		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	須恵器	
S P 118	3A	円	0.5		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器・須恵器	
S P 119	3A	東西方向に長い楕円	0.9	0.5	0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器・須恵器	
S P 120	3A	円	0.3		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	なし	
S P 121	3A	円	0.4		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 122	3A	東西方向に長い楕円	0.4	0.2	0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器	
S P 123	3A	東西方向に長い楕円	0.8	0.4	0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	瓦器・土師器	
S P 124	3A	円	0.3		0.1	N4/0灰色細粒シルト混粘土	なし	

I 成法寺遺跡第13次調査(S H94-13)



第14図 第2区 S P 102~104 · 107 · 109 · 110 · 112~116 · 118 · 119 · 121 · 123

S D 101~105 出土遺物実測図 (S=1/4)



第15図 第2区 第3層 出土遺物実測図 (S=1/4)

### 溝 (SD)

#### S D101

1・2A・B地区で検出した。東西方向に伸びる。検出長6.7m、幅2.5m、深さ0.3mを測る。埋土はN4/0灰色微粒砂混粘土で、須恵器・土師器・瓦器、石など(220～223)が出土している。220は瓦器楕である。内面は表部磨耗のため調整不明であるが、ミガキを施すと思われる。外面ナデ。221・222は土師器小皿。223は石臼(挽き臼)である。摺面は断面U字形の溝が刻まれており、側面下位に挽き手を差し込む方形の穴がある。物受皿は周囲に幅約5cm、高さ約4cmの縁が巡り、縁よりに物配り穴が開けられている。

#### S D102

2・3A・B地区で検出した。南東から北西方向に伸びる。検出長4.0m、幅1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は上から10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土、N4/0灰色細粒砂混粘土で、瓦器・土師器など(224～228)の破片が少量出土している。224～227は瓦器楕。224は内面表部磨耗のため調整不明であるが、ミガキを施すと思われる。外面ナデ。225は断面台形、226・227は断面三角形の高台が付く。228は土師器小皿である。

#### S D103

2・3B地区で検出した。南北方向に伸びる。検出長4.0m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒シルト混粘土で、瓦器、土師器など(229～234)の破片が少量出土している。229～233は土師器小皿で、229～231は体部から口縁部にかけて屈曲し、232・233は丸く曲がる。234は平瓦で、凹面に布目を施す。

#### S D104

3A・B地区で検出した。南東から北西方向に伸びる。検出長3.0m、幅0.4～0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は上からN3/0暗灰色細粒シルト混粘土で、瓦器、土師器など(235)の破片が少量出土している。235は瓦器小皿で、内外面ナデを施す。

#### S D105

3～5A・B地区で検出した。南東から北西方向に伸び、南側でS E101を切る。検出長7.4m、幅

2.5m、深さ0.6mを測る。埴土は上から10YR4/4褐色粗粒砂混粘土、2.5Y5/4黄褐色細礫混粘土で、瓦器、土師器など(236~238)の破片が出土している。236・237は瓦器椀で、237の見込みには平行線状暗文を施す。238は土師器小皿。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第3層からは土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器等が出土した。このうち図化し記載したものは239~253である。239~241は瓦器小皿。242~245は瓦器椀。242~245は高台が雑に貼り付き、内面ミガキを施す。また、242の見込みには平行線状暗文を施す。246~252は土師器小皿で、252は皿の高台部である。253は軒平瓦で、連珠文を配す。

#### 3.まとめ

今回の調査では鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・溝を検出した。第2区の井戸(S E 101)は13世紀後半頃に機能しており、第1区の土坑(S K 101)や第2区の土坑(S K 106)から出土した多数の土器は、当該期に使用されたものである。第2区の全域で検出した小穴は、建物を構成していると思われるが、調査地が狭く建物を復元するまでは至らなかった。このほかの遺構も13世紀から16世紀初めにかけて存続しており、当該期の居住域が存在していることが判明した。また、第1区の南側は遺構の検出がなく、居住域内の空閑地ではないかと考える。

井戸(S E 101)の廃絶時期は13世紀末頃であるが、掘形内に12世紀の遺物が含まれていることから、近接する地域に12世紀の集落が存在している可能性が高いと推測される。

#### 参考文献

- ・尾上 実 1983 「南河内の瓦器椀」「古文化論叢」藤沢一夫先生古希記念論集
- ・福岡英人 1986 「成法寺遺跡発掘調査概要・I-八尾市南本町所在-」大阪府教育委員会
- ・山上 弘 1989 「成法寺遺跡発掘調査概要・IV-八尾市高美町所在-」大阪府教育委員会
- ・森島康雄 1990 「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会
- ・原田昌則 1991 「第6章 第6次調査(S H90-6)発掘調査報告」「成法寺遺跡〈第1次調査-第4次調査・第6次調査報告書〉」八尾市文化財調査研究会報告33 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・宮野淳一・西川寿勝 1992 「成法寺遺跡発掘調査概要・VI-八尾市南本町1丁目所在-」大阪府教育委員会
- ・坪田真一 1994 「IX 成法寺遺跡(第12次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告42」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・中世土器研究会編 1996 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社



# 図版



第1区 全景(北から)



第1区 調査状況(北から)



第1区 SK101(北から)



第1区 SK101遺物出土状況(東から)



第2区 調査状況(東から)



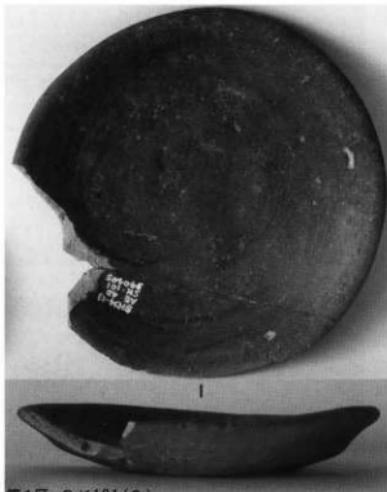
第2区 全景(北から)



第2区 SE101(北西から)



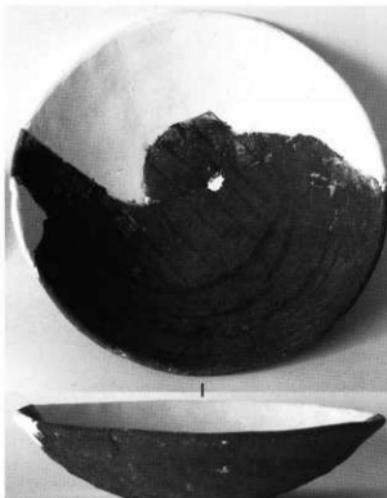
第2区 SE101断面(北西から)



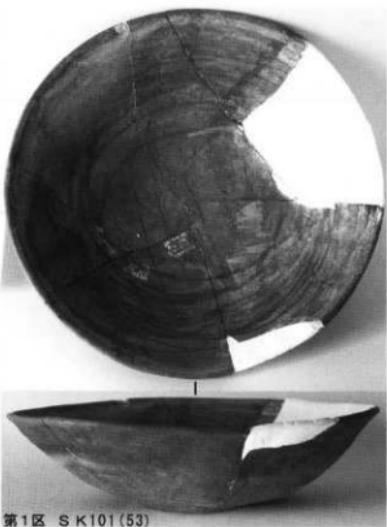
第1区 SK101(2)



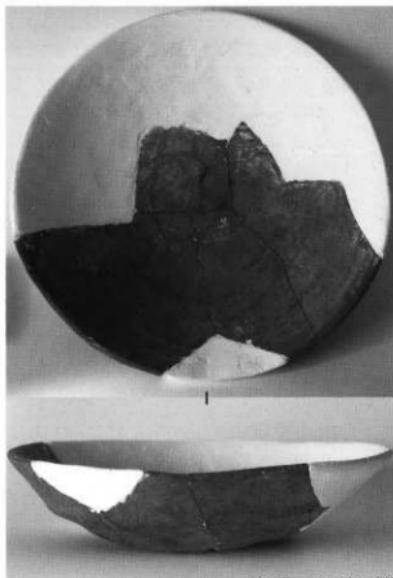
第1区 SK101(19)



第1区 SK101(40)



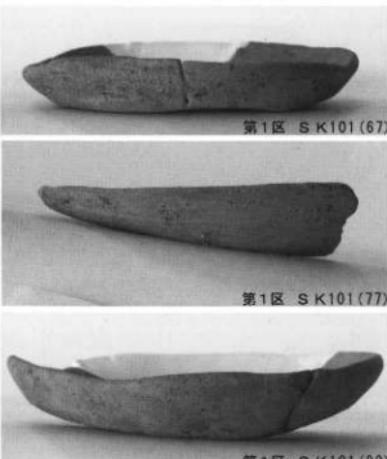
第1区 SK101(53)



第1区 SK101(60)



第2区 SE101(107)



第1区 SK101(67)

第1区 SK101(77)

第1区 SK101(92)



第2区 SE101(117)

第2区 SE101(118)



第2区 SE101(119)



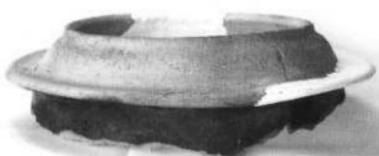
第2区 SE101(120)



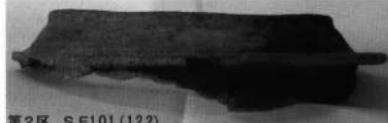
第2区 SE101(125)



第2区 SE101(126)



第2区 SE101(121)



第2区 SE101(122)



第2区 SE101(123)



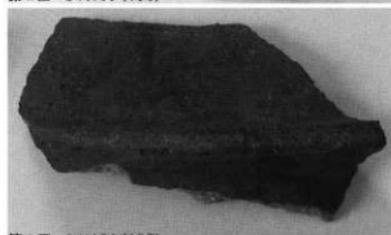
第2区 SK103(135)



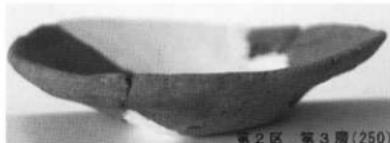
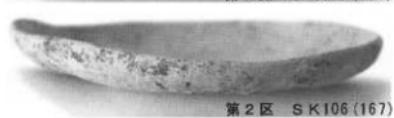
第2区 SK103(136)



第2区 SE101(124)



第2区 SK104(137)



II 成法寺遺跡第15次調査（S H95-15）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南本町3丁目31-2で実施した社会福祉施設建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第15次調査(SH95-15)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成7年4月5日～同年4月25日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約425m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は石原好恵・中西明美・西村和子・松井三千子である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。  
【遺物実測】中西・西村(和)・石原・飯塚直世・國津れいこ・鈴木裕治・徳谷尚子  
【遺物トレース】徳谷  
【執筆・編集】西村

## 本　文　目　次

1.はじめに	21
2.調査概要	22
1) 調査の方法と経過	22
2) 層序	22
3) 検出遺構と出土遺物	22
3.まとめ	31

## 挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図	21
第2図 地区割図	22
第3図 地層断面図	23
第4図 検出遺構平面図	24
第5図 S E101・102平面断面図	25
第6図 S E101出土遺物実測図	26
第7図 S E102出土遺物実測図	27
第8図 S K101・102・104平面断面図	28
第9図 S K101～105出土遺物実測図	29
第10図 S P104・106 S D101・103・104 第1層 第2層出土遺物実測図	31

## 表 目 次

第1表 小穴(S P)法量表.....30

## 図 版 目 次

図版一 調査地周辺 洪水状況 西区全景 東区全景 S E 101 S E 101断面  
S E 101完掘 S E 102

図版二 S E 102遺物出土状況 S E 102掘削状況 S E 102 S E 102完掘 S K 101  
S K 102遺物出土状況 S K 104 S K 104遺物出土状況

図版三 S E 101 S E 102出土遺物

図版四 S E 102 S K 102 S K 104出土遺物

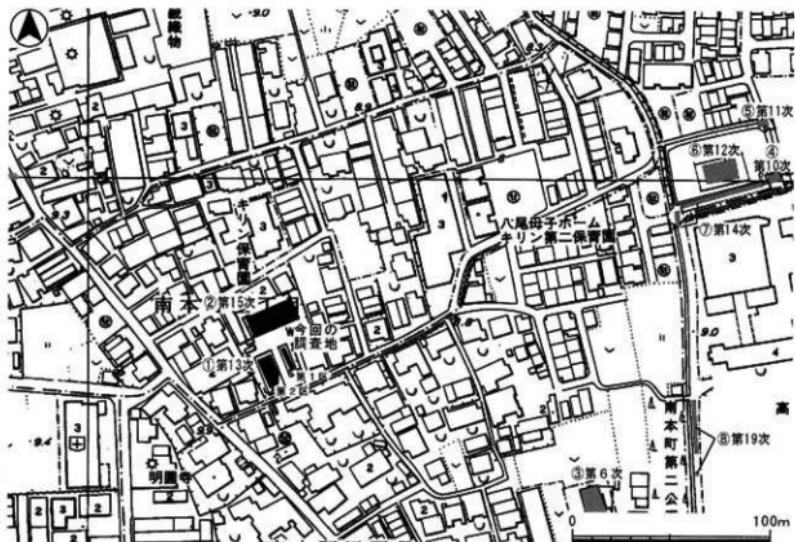
## II 成法寺遺跡第15次調査(S H95-15)

### 1. はじめに

成法寺遺跡は、河内平野の中を北または北西方向に流れている長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置している。同遺跡は八尾市の中央部に位置し、現在の行政区画では、八尾市の光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園がその範囲とされている。

当遺跡内では、大阪府教育委員会(以下府教委と記載)、八尾市教育委員会(以下市教委と記載)、財團法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)が調査を実施しており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。今回調査を行った場所は八尾市南本町3丁目31-2(第1図の②)で、平成6年度に調査を実施した第13次調査(本書掲載1)の北隣にある。

今回の調査地の周辺では、北東側約400m地点で、府教委が都市計画道路平野中高安線拡幅工事に先立つ第4次調査を行っている。この調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代前期の竪穴住居を検出している(山上1989)。北約300m地点では、同工事に先立つ府教委第6次調査を行っており、11世紀末の瓦器碗が出土する集落遺構を検出している(宮野・西川1992)。北西約300m地点では、同工事に先立つ府教委第7次調査を行っており、墨書き人面土器が出土している(中村1994)。この他、同工事に先立つ一連の府教委の調査では、数多くの遺構および遺物を検出している。また、南東側約200mでは研究会が第6次調査(第1図③)を行っており、14世紀末か



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

ら15世紀初頭にかけての遺構を検出している(原田1991)。さらに、東側約250mでは研究会が第12次調査(第1図⑥)を行っており、奈良時代の井戸の中から墨書き人面土器が出土している(坪田1994)。(第1図の調査地点【丸数字】は本書掲載Iの第1表を参照)

当遺跡の周辺には同一地形上に矢作遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡が存在しており、これらの遺跡からは当遺跡と同様、弥生時代から近世に至るまでの遺構及び遺物が多数検出されている

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、社会福祉施設建設に伴うもので、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第15次調査である。調査は施設建設部分を対象に約425m<sup>2</sup>を行った。

調査では、調査地の南西側に基準の杭(任意)を打ち、そこから北に20m、東に40mの範囲を地区割した。地区割には南西隅から北に5m毎にアラビア数字(1~4)、東に5m毎にアルファベット(A~H)を名付けた。1A~4Hの範囲が今回の地区割である。地区割の南西隅にはX0、Y0を設け、その地点から北にX0~X20、東にY0~Y40を設定し、X・Yの交点を地点の名称とした。調査は、現地表下0.5~0.7m前後まで機械掘削を行ない、以下0.2~0.3mについては人力掘削を行なった。掘削土の置き場の都合で、西区と東区に分けて調査を行った。

### 2) 層序

調査地では、普遍的に存在する4層を基本層序とした。

第0層 盛土。現地表面は

T.P.+9.8m前後を測る。層厚は0.7~0.8mであるが、今回調査以前に掘りかえした跡が多くあり、深い場所ではT.P.+7.0mまで達している。

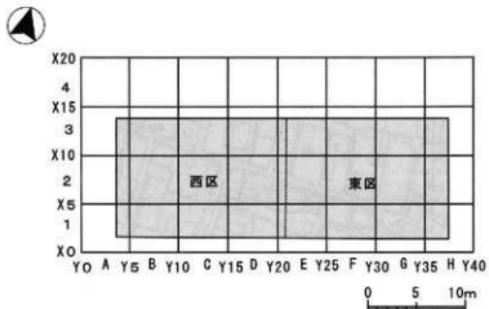
第1層 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土。層厚は0.2mで、鎌倉時代末期から近世の遺物を含んでいる。

第2層 2.5Y5/4黄褐色細粒シルト混粘土。層厚0.3mで上面は土壤化している。上面で調査を実施した結果、鎌倉時代後期から室町時代の遺構を検出した。

第3層 5Y7/8黄色細粒砂混粗粒シルト。層厚は0.3m以上を測る。河川堆積と思われる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

現地表から約1.0m下の第2層上面で、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸2基(S E101・102)、土坑5基(S K101~105)、小穴11個(S P101~111)、溝5条(S D101~105)を検出した。

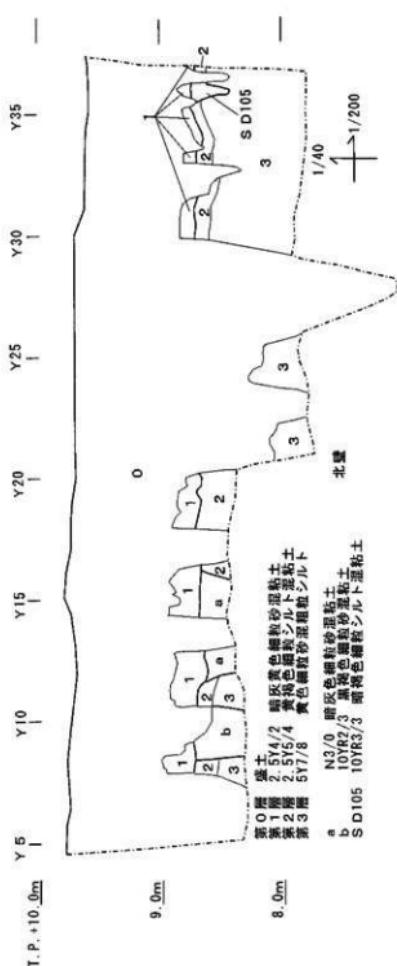


第2図 地区割図 (S=1/500)

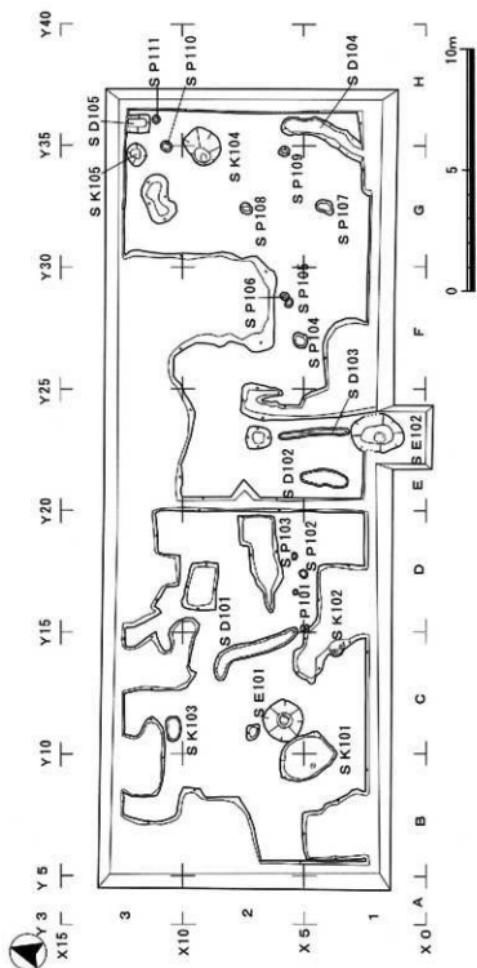
## 井戸(S E)

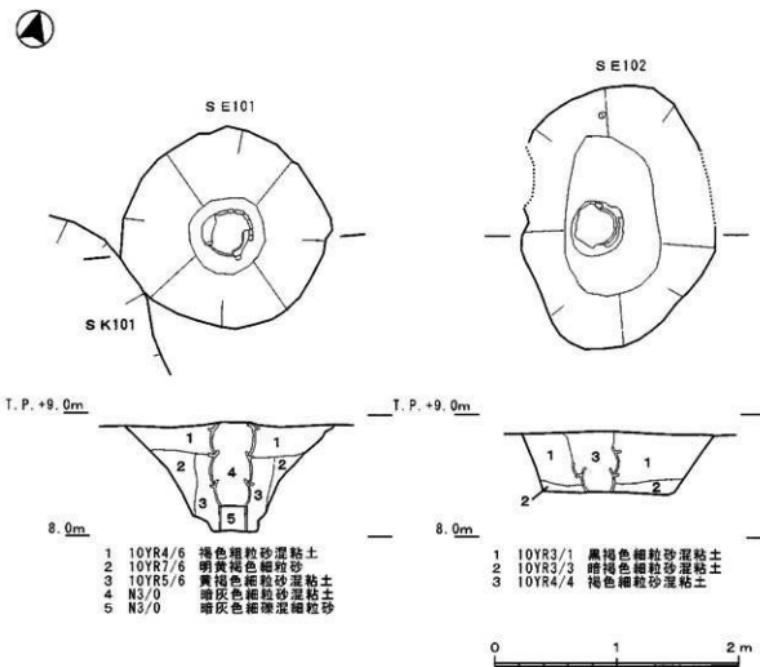
## S E101

2C地区で検出した。掘形の平面の形状は円形で、径1.7m、深さ0.85mを測る。中央に曲物1段と羽釜3段を積み重ねた井戸側を設置している。埋土は掘形が10YR4/6褐色粗粒砂混粘土、10YR7/6明黄褐色細粒砂、10YR5/6黄褐色細粒砂混粘土で、井戸側内は、N3/0暗灰色細粒砂混粘土、N3/0暗灰色細粒混細粒砂である。井戸掘形からは瓦器・土師器等(1~5)が、井戸側内からは瓦器等(6~7)が出土した。1・2は瓦器碗で、見込みに平行線状暗文を施す。また、内面は横方向のミガキを、外面はナデを施す。1の高台は断面台形で、「ハ」の字に広がり、2の高台は断面三角形である。1・2は尾上編年(尾上1983)の和泉型III-3期に比定できる。3~5は土師器小皿で、4は底部に凹凸がある。6・7は瓦器碗で、見込みに螺旋状暗文を施すものと思われ、外面はナデを施す。尾上編年の和泉型IV-3~IV-4期に比定でき、14世紀初め頃のものである。8~10は土師器羽釜で、底部を打ち欠いて井戸側に用いられていた。本来は煮炊き用として使用されていた羽釜で、外側に煤が付着している。8が上から1段目、9が2段目、10が3段目である。8は口縁端部を外側につまみ出し面をもち、鍔は水平方向にのびる。9は口縁端部が丸く、鍔部は上方に伸びる。10は口縁端部を外側につまみ出し面をもつ。鍔部は下方に伸びる。8~10は、外面に強いナデを施しており、所々で砂粒が移動している。また、内面もナデを施している。8~10は森島編年(森島1990)のA型式で13世紀中頃~末頃に比定できる。井戸の時期は13世紀中頃~14世紀初めにかけて存続したと考えられる。



第3図 地層断面図(垂直1/40 水平1/200)

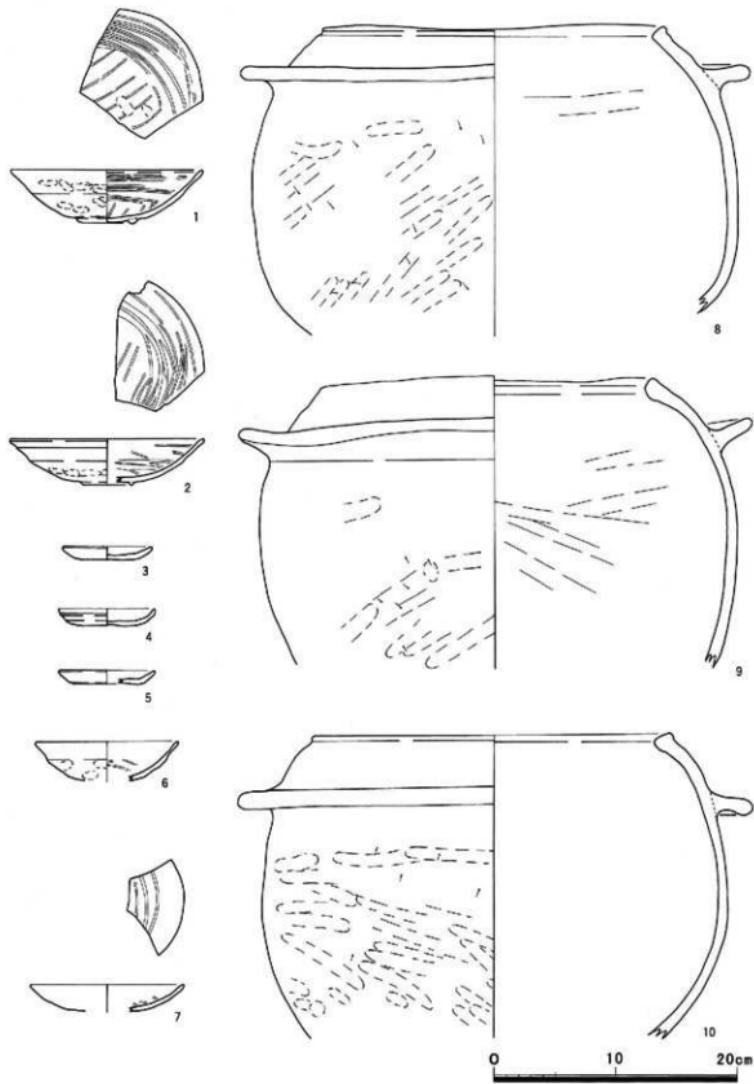




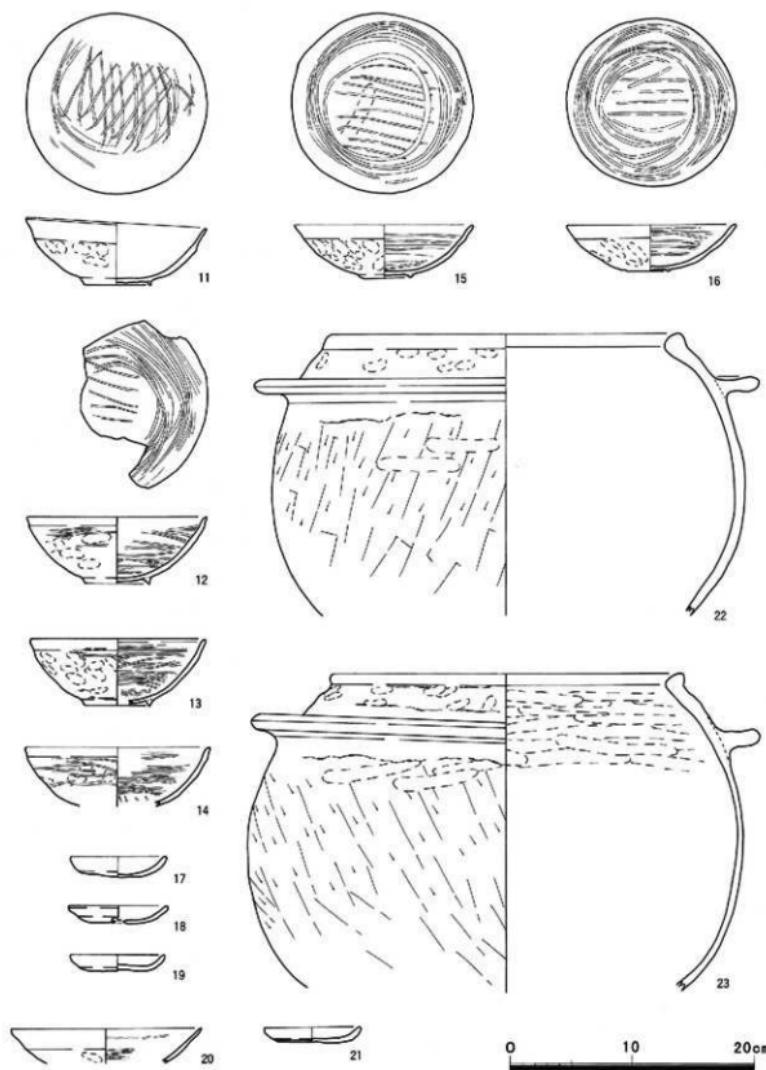
第5図 S E 101・102平面面図 (S=1/40)

## S E 102

1E地区で検出した。掘形の平面の形状は楕円形で、長径2.2m、短径1.5m、深さ0.5mを測る。中央に羽釜2段を積み重ねた井戸側を設置している。2段目の下は砂層に達しており、湧水が認められた。埋土は掘形が10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土、10YR3/3暗褐色細粒砂混粘土、井戸側内10YR4/4褐色細粒砂混粘土である。掘形からは11~19が出土した。11~16は瓦器柄、17~19は土師器皿である。11・13は見込みに格子状暗文を施す。12~14は外面に横方向の雜なミガキを施す。11~13には断面三角形の高台が貼り付く。15・16は見込みに平行線状暗文を施し、断面半円形の高台が貼り付く。尾上編年の和泉型III-3期に比定できる。井戸側内からは20・21が出土した。20は瓦器碗で、内面ミガキを施す。21は土師器皿で、内外面ナデを施す。22・23は土師器の羽釜で底部を打ち欠いて井戸側に用いられていた。本来は煮炊きに用いた羽釜で、外面に煤が付着している。22が上から1段目、23が2段目である。22は口縁端部が丸く、鋸部は水平に伸びる。23は口縁端部を外側につまみ出し面をもつ。鋸部は下方に伸びる。22・23は森島編年(森島1990)のA型式で、13世紀中頃~末頃に比定できる。



第6図 SE 101出土遺物実測図 (S=1/4)



第7図 SE 102出土遺物実測図 (S=1/4)

## 土坑 (SK)

### SK 101

1・2B・C地区で検出した。平面の形状は梢円形で、長径2.4m、短径1.9m、深さ0.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土である。土師器、瓦器、瓦質土器等が出土した。出土遺物のうち24～35を図化した。24～26は瓦器碗である。24は見込みに斜格子状暗文、25・26は平行線状暗文を施す。27～30は瓦器小皿である。27は見込みに連結輪状暗文、28は平行線暗文を施す。31・32は土師器小皿。33は白磁碗。34は青磁碗である。35は梢円形の石で、中央に磨り潰すことによりできた窪みが1箇所認められる。

### SK 102

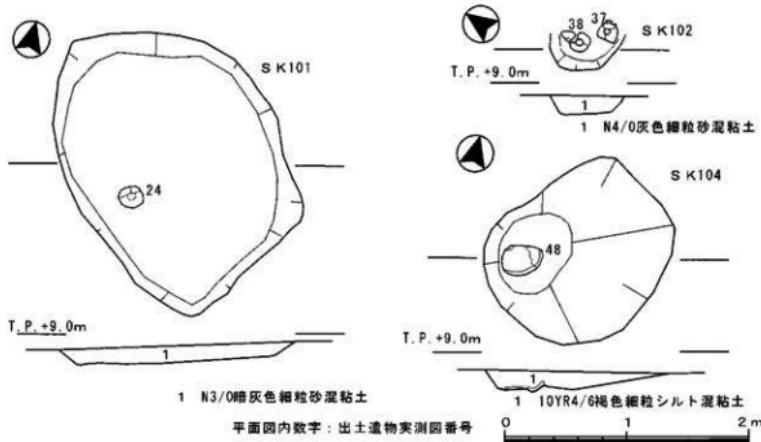
1C地区で検出した。平面の形状は円形で、径0.6m、深さ0.3mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器、瓦質土器等が出土した。出土遺物のうち36～43を図化した。36～38は瓦器碗で平行線状暗文を施す。39・40は瓦器小皿。41・42は土師器小皿。43は瓦質三足釜で、口縁部は内傾し丸く終わる。鋲は上向きに貼り付く。

### SK 103

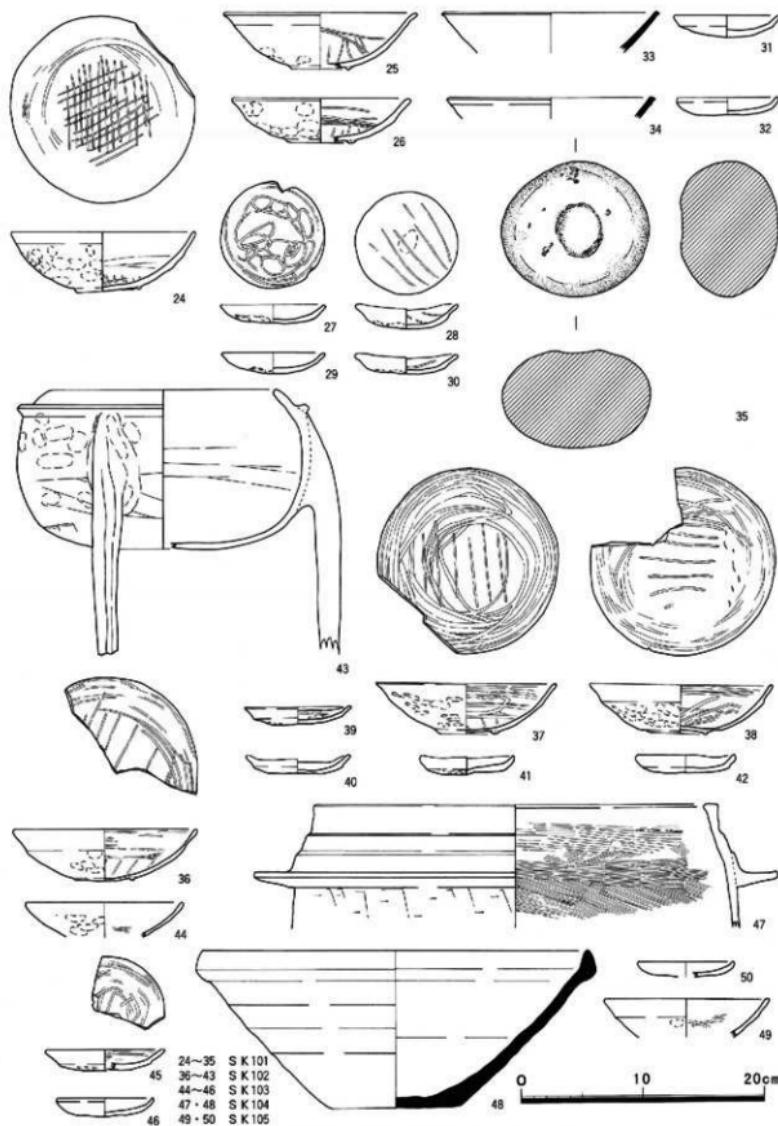
3C地区で検出した。平面の形状は梢円形で、長径1.0m・短径0.6m・深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器等が出土した。出土遺物のうち44～46を図化した。44は瓦器碗で、内面ミガキ外面ナデを施す。45は瓦器小皿。46は土師器小皿。

### SK 104

2・3G・H地区で検出した。平面の形状は梢円形で、長径1.6m・短径1.4m・深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒シルト混粘土である。内部からは瓦質土器、須恵器等が出土した。出土遺物のうち47・48を図化した。47は瓦質羽釜で、口縁端部に面をもち、鋲部はほぼ水平に伸びる。内面ハケ、外面ケズリを施し、砂粒が横に動いている。森島編年のEかF型式で15世紀に比定できる。48は須恵器鉢で、口縁端部に面をもつ。



第8図 SK 101・102・104平断面図 (S=1/40)



第9図 S K 101~105出土遺物実測図 (S=1/4)

### S K 105

3G-H地区で検出した。平面の形状は梢円形で、長径1.0m・短径0.8m・深さ0.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒シルト混粘土である。内部からは土師器、瓦器等が出土した。出土遺物のうち49・50を図化した。49は瓦器碗で、内面ミガキを施す。14世紀初頭に比定できる。50は土師器小皿である。

#### 小穴 (S P)

##### S P 101~111

調査地全域で検出した。平面の形状が円形のものはS P 101~106、S P 108~111で、梢円形のものはS P 107である。径0.2~0.75m、深さ0.05~0.2mを測る。埋土はS P 101~103がN3/0暗灰色粘土、S P 104~106がN3/0暗灰色細粒砂泥粘土、S P 107・110・111が10YR4/4褐色細粒シルト混粘土、S P 108・109が10YR4/4褐色細粒砂泥粘土である。S P 104~111内からは、瓦器、土師器等の破片が少量出土した。このうち図化したものは、S P 104から出土した瓦器碗(51)、土師器小皿(52)、S P 106から出土した瓦器碗(53)である。51は瓦器碗で、底部に断面台形の高台が貼り付き、見込みには平行線状暗文を施す。52は土師器小皿。平らな底部で、屈曲する口縁部

第1表 小穴(S P)法量表

遺構番号	調査地名	地区	平面形状	径	長径	短径	深さ	堆積土	出土遺物
S P 101	西	2 D	円	0.2			0.05	N 3/0暗灰色粘土	なし
S P 102	西	1・2 C	円	0.3			0.1	N 3/0暗灰色粘土	なし
S P 103	西	2 D	円	0.25			0.1	N 3/0暗灰色粘土	なし
S P 104	東	1・2 F	円	0.6			0.2	N 3/0暗灰色細粒砂泥粘土	土師器皿 瓦器碗 等
S P 105	東	2 F	円	0.35			0.1	N 3/0暗灰色細粒砂泥粘土	瓦器碗 等
S P 106	東	2 F	円	0.35			0.15	N 3/0暗灰色細粒砂泥粘土	瓦器碗 等
S P 107	東	1 G	梢円		0.75	0.5	0.1	10YR 4/4褐色細粒シルト混粘土	瓦器碗 等
S P 108	東	2 G	円	0.45			0.15	10YR 4/4褐色細粒砂泥粘土	瓦器碗 等
S P 109	東	2 G・H	円	0.1			0.15	10YR 4/4褐色細粒砂泥粘土	瓦器碗 等
S P 110	東	3 G・H	円	0.45			0.1	10YR 4/4褐色細粒シルト混粘土	瓦器碗 等
S P 111	東	3 H	円	0.3			0.1	10YR 4/4褐色細粒シルト混粘土	瓦器碗 等

である。53は瓦器碗で、断面逆三角形の高台が貼り付く。

#### 溝 (S D)

##### S D 101

2C-D地区で検出した。南北方向に伸びるものである。検出長3.8m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR7/6明黄褐色細粒砂泥粘土である。溝内からは瓦器、須恵器等が出土した。出土遺物のうち54・55を図化した。54は瓦器碗である。底部には断面逆台形の高台が貼り付く。見込みに平行線状暗文を施す。55は東播系須恵器の鉢で、口縁部は外側に面をもつ。内外面回転ナデを施す。

##### S D 102

1・2E地区で検出した。南北方向に伸びるものである。検出長2.0m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/6黄褐色細粒砂泥粘土である。溝内からは土師器皿、瓦器碗等が出土した。

##### S D 103

1・2E地区で検出した。南北方向に伸びるものである。検出長2.9m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂泥粘土である。溝内からは瓦器等が出土した。出土遺物のうち56を

図化した。56は瓦器椀で、断面逆台形の高台が貼り付く。見込みに平行線状暗文を施す。

#### S D104

1・2G・H地区で検出した。南北方向に伸びるものである。検出長3.5m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR5/6黄褐色細粒シルト混粘土である。溝内からは瓦器等が出土した。出土遺物のうち57を図化した。57は瓦器椀で断面逆三角形の高台が貼り付く。見込みに斜格子状暗文を施す。

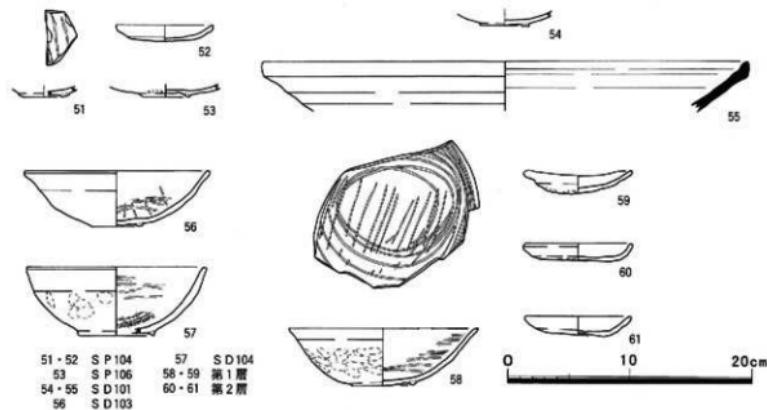
#### S D105

3H地区で検出した。南北方向に伸びるものである。検出長1.0m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色細粒シルト混粘土である。溝内からは瓦器椀等が出土した。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第1層からは瓦器(58・59)が出土した。58は瓦器椀で、断面三角形の高台が貼り付く。見込みに平行線状暗文を施す。13世紀前半に比定できる。59は瓦器小皿で、底部は丸い。

第2層からは土師器(60・61)が出土している。60・61は土師器小皿である。60は平らな底部から屈曲する口縁部。61は凹凸のある底部である。



第10図 S P 104・106 S D 101・103・104 第1層 第2層出土遺物実測図(S=1/4)

### 3.まとめ

今回の調査では、前年度調査地【成法寺遺跡第13次調査(S H94-13) 本書掲載I】で検出した鎌倉時代から室町時代の遺構と同時期の遺構が存在していることが確認された。

西側と中央南側で検出した井戸(S E101・102)は、13世紀末~14世紀初めにかけて機能していたと考えられる。また北東部で検出した土坑(S K104)は、15世紀に比定できる遺物が出土しており、居住域はこの時期まで存在していると推測できる。また、建物を構成すると考えられる小穴を数箇所で検出したが、13次調査と同様、今回も調査地が狭いことから建物を復元するまでには至らなかった。

第13次と第15次調査地には、13世紀～15世紀にかけての居住域が存在していることが判明した。その範囲は不明であるが、少なくとも第13次調査地から北側で多くの遺構を確認していることから、今回の調査地より北側にも居住域が広がっている可能性が高いと言えよう。

#### 参考文献

- ・尾上 実 1983 「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』藤沢一夫先生古希記念論集
- ・山上 弘 1989 「成法寺遺跡発掘調査概要・IV－八尾市高美町所在－」大阪府教育委員会
- ・原田昌則 1991 「第6章 第6次調査(S H90-6)発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書〉』八尾市文化財調査研究会報告33 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・森島康雄 1990 「中河内の羽釜」『中世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
- ・宮野淳一・西川寿勝 1992 「成法寺遺跡発掘調査概要・VI－八尾市南本町1丁目所在－」大阪府教育委員会
- ・坪田真一 1992 「I 成法寺遺跡(第5次調査)」「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)」八尾市文化財調査研究会報告35 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・中村清美 1994 「成法寺遺跡発掘調査概要・VII－八尾市南本町1丁目所在および八尾市東本町5丁目所在(東郷遺跡)－」大阪府教育委員会
- ・坪田真一 1994 「IX 成法寺遺跡(第12次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告42」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・中世土器研究会編 1996 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

# 図版



調査地周辺(北東から)



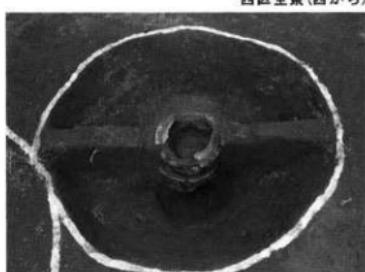
調査状況(南東から)



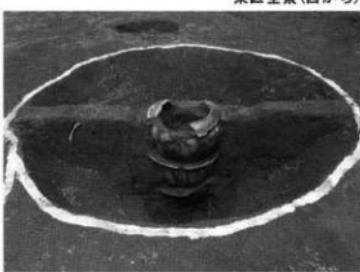
西区全景(西から)



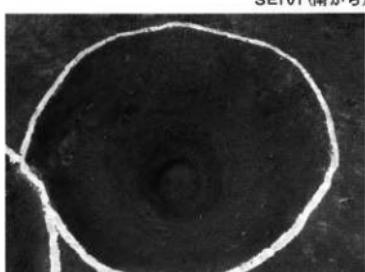
東区全景(西から)



SE101(南から)



SE101断面(南から)



SE101発掘(南から)



SE102(北から)



SE102遺物出土状況(北から)



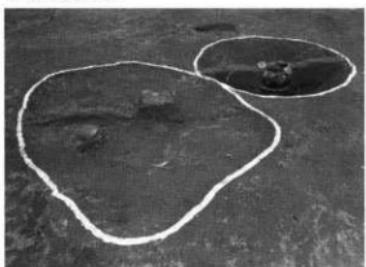
SE102墳削状況(南から)



SE102(南から)



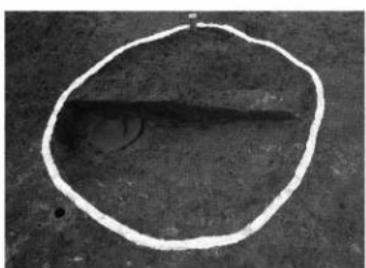
SE102完掘(南から)



SK101(南から)



SK102遺物出土状況(南から)



SK104(南から)



SK104遺物出土状況(南から)





S E102 (16)



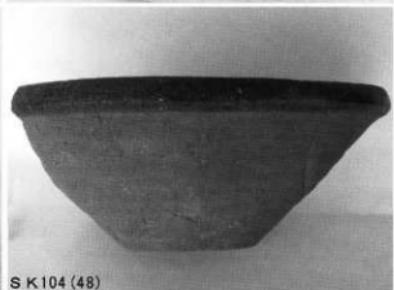
S E102 (17)



S K102 (43)



S K104 (47)



S K104 (48)

III 東郷遺跡第59次調査（T G 2003-59）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘3丁目132他で実施した立体駐車場建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第59次調査(TG2003-59)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年4月21日～同年5月12日(実働11日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約250m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は國津れいこ・鈴木裕治・都築聰子・實樹婦美了・横山妙子である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。  
【遺物実測】飯塚直世・國津・鈴木・徳谷尚子・中野靖之(現 福井県教育委員会嘱託)  
【遺物トレース】徳谷  
【執筆・編集】西村

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	33
2.調査概要.....	33
1) 調査の方法と経過.....	33
2) 層序.....	34
3) 検出遺構と出土遺物.....	34
3.まとめ .....	41

## 挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図.....	33
第2図 地区割図.....	34
第3図 第1～3区地層断面図.....	35
第4図 第1区 第1～3面平面図.....	36
第5図 SD101断面図 .....	37
第6図 SD202断面図 .....	39
第7図 SD301断面図 .....	39
第8図 出土遺物実測図.....	40

## 図版目次

- 図版一 調査地周辺 第1区 挖削状況 第1区 第1面全景 第1区 第2面全景 第1区  
第3面全景 第1区 SD202 第2区 第1面全景 第2区 第2面全景
- 図版二 第3区 全景 第3区 挖削状況 SK102 SD101 SD301 1~6層 7層出土  
遺物

### III 東郷遺跡第59次調査(T G 2003-59)

#### 1. はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央から北よりに位置し、現在の行政区画では本町1・7丁目、東本町1~5丁目、北本町2丁目、莊内町1~2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、光町1~2丁目、旭ヶ丘1丁目の一部がその範囲になっている。地形的には長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置している。

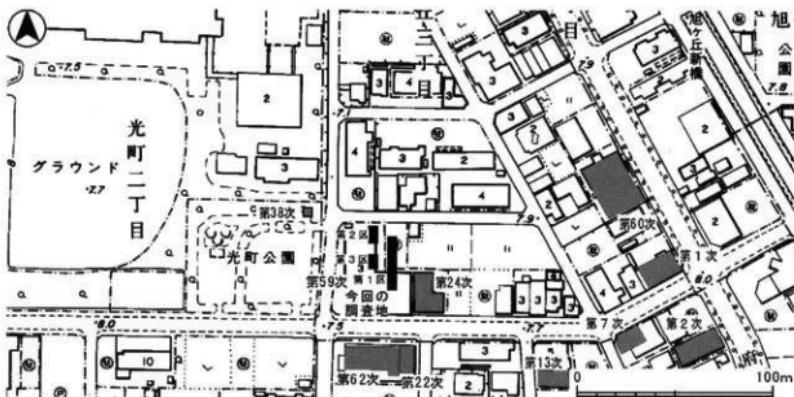
当遺跡では、大阪府教育委員会(以下府教委)および八尾市教育委員会(以下市教委)ならびに財団法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近代に至る遺構の検出および遺物の出土が確認されている。

今回の調査地の周辺では、府教委が楠根川改修工事に伴う発掘調査を行っており、弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。中でも特筆すべき遺物には古墳時代の特殊器台があり、この器台は吉備からの搬入品である可能性があると考えられている(奥1989)。市教委では第1次調査を行っており平安時代前期の井戸を検出している(米田1981)。また、第22次調査では、古墳時代前期の建物遺構や溝・落ち込みが検出されている(米田1987)。研究会では第24次調査をおこなっており、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代中期・鎌倉時代・近世の遺構が検出されている(高萩1991)。

#### 2. 調査概要

##### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は立体駐車場建設に伴う調査で、研究会が東郷遺跡内で行った第59次調査にある。調査にあたっては、現地表下約1.5mまでを機械で掘削し、以下0.3mの厚みの地層につい



ては人力で掘削した。今回の調査では、大阪府が下水道工事で使用している標高値(調査地南北側道路上T.P. +7.908m)を使用した。地区割は、調査地を覆う南北35m、東西25mの範囲に任意で設定した。区割りは、調査地の北側と東側の境界にあわせ、北東隅を任意の基準点とし、5m毎に南へアルファベット(A~G)、西へアラビア数字(1~5)を付けた。地区名は、各地区を1A~5G区と呼称した。地区割の北東隅にはX0、Y0を設け、その地点から南にX0~X35、西にY0~Y25を設定し、X・Yの交点を地点の名称とした。

## 2) 層序

0層は盛土。1層は5Y5/1灰色細粒砂混粘土。2層は5B3/1暗青灰色細粒砂混粘土で、旧耕作土である。3層は10YR5/8黄褐色粗粒砂混粘土。4層は7.5YR4/6褐色粗粒砂混粘土。5層は7.5YR3/4暗褐色細粒砂混粘土。6層は10YR4/6褐色粘土質粗粒シルトで、古墳時代前期～中期頃の遺物を含んでおり、上面は攪拌されている。上面で調査を行い、古墳時代後期・飛鳥時代・平安時代後期・近世の遺構を検出した。7層は褐色系のシルト質粘土～シルトで、遺物が極少量出土した。上面は攪拌されている。上面で調査を行い、古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。8層は10YR7/6明黄褐色細粒シルト。9層は10YR7/1灰白色細粒シルト質粘土で、上面は攪拌されている。上面で調査を行い、弥生時代後期の遺構を検出した。10層は5Y5/1灰色粘土質細粒シルト。11層は10BG5/1青灰色細粒シルト。12層は5B4/1暗青灰色粘土と5B7/1明青灰色細粒シルトのラミナである。10層～12層は水成層である。

## 3) 検出遺構と出土遺物

### 第1区

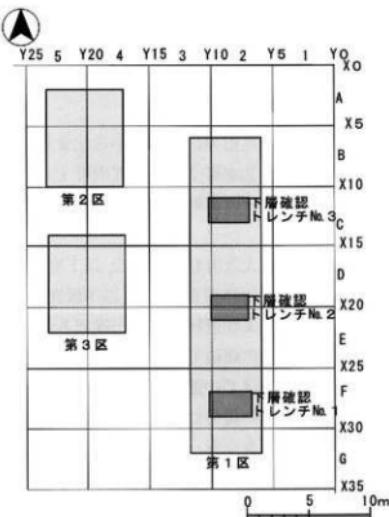
#### 第1面

T.P. +6.6m前後の6層上面で古墳時代後期の溝1条(S D101)、飛鳥時代の土坑1基(S K102)、平安時代後期の土坑1基(S K101)、近世の落ち込み2箇所(S O101・102)を検出した。

#### 土坑(S K)

##### S K101

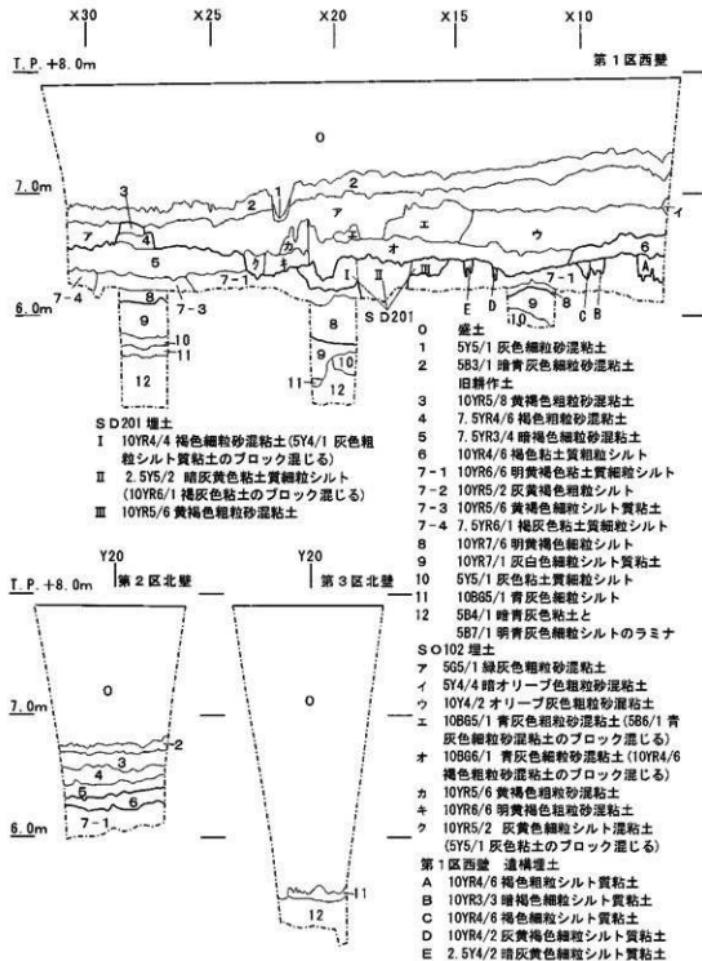
2D地区で検出した土坑で、西側はS O102によって切られ、また、東側は調査区外に至るため、本来の遺構の形状および規模は不明である。検出した平面形状は南東一北西方向に長い不定形で、長径4.7m、短径1.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.7mを測る。埋土は上から10YR6/8明黄褐色細粒シルト混粘土(N4/0灰色粗粒シルトのブロック混じる)、5Y6/1灰色細粒砂混粘土(7.5YR4/3褐色粗粒シルトのブロック混じる)で、下層から土師器、瓦器および石が出土した。このうち土師器小皿(1・2)を図化した。1は内外面ナデを施し、外面には指頭圧痕が残る。2は



第2図 地区割図 (S=1/400)

### III 東部遺跡第59次調査(TG2003-59)

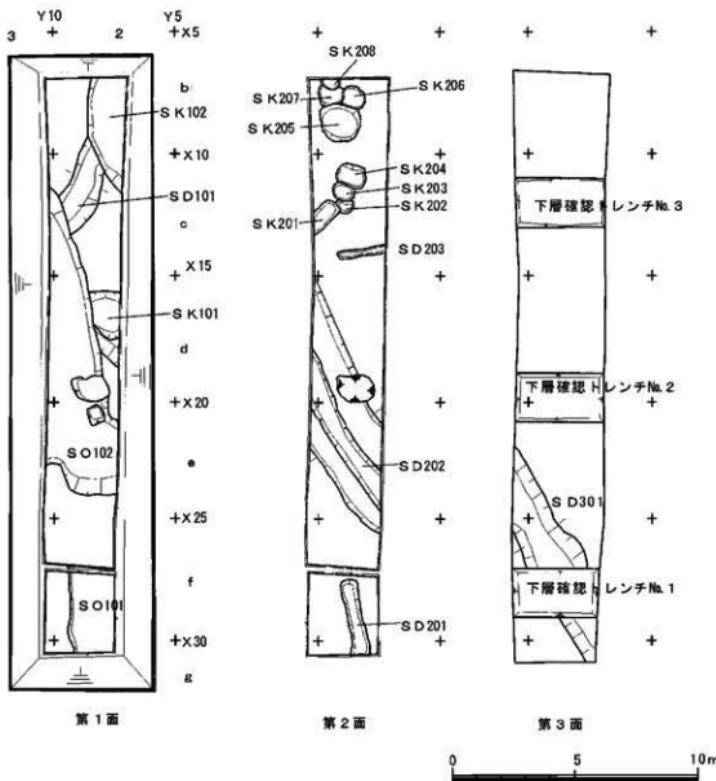
内外面に指頭圧痕が残る。なお、瓦器は体部の破片で復元できなかったが、内面にミガキを、外側にナデを施す模様で、平安時代後期のものと思われる。



第3図 第1～3区地層断面図（垂直1/40 水平1/200）

S K 102

2B・C地区で検出した。南西側で S D 101を切る。遺構の北東側は調査区外に至るため、本来の遺構の形状および規模は不明である。検出した南北幅4.7m、東西幅1.6m、深さ0.2を測る。埋土は3層に分かれ、上から7.5YR4/2灰褐色粗粒シルト混粘土(5Y6/1灰色粗粒シルトのブロック混じる)、7.5YR4/6褐色細粒砂混粘土(5Y7/1灰白色粗粒シルトのブロック混じる)、7.5YR3/4暗褐色細粒シルト質粘土(7.5YR4/3褐色細粒砂混粘土のブロック混じる)である。上層からは土師器高杯(3・4)が出土した。3は脚部で、内面はシボリ目と指頭圧痕を施す。4は裾部で、指頭圧痕を施す。飛鳥時代に比定できる。



第4図 第1区 第1～3面 平面図 (S=1/200)

## 溝(S D)

## S D101

2C地区で検出した溝で、北側でS K102に切られる。南側はS O102に切られている。検出した平面形状は南西—北東へ伸びる溝で、幅1.2~1.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は

7.5YR4/2灰褐色粗粒シルト混粘土

(5Y6/1灰色粗粒シルトのブロック混じる)で、土師器高杯(5)や須恵器壺(6)が出土した。5は内湾する口縁部で、内外面ナデを施す。6は球形の体部で、内面同心円タタキを施す。外面上位回転カキメ、下位タタキを施す。古墳時代後期に比定できる。

## 落ち込み(S O)

## S O101

2F-G地区で検出した。本来の検出面は第3層上面であり、遺構の規模や深さ等の詳細は不明である。調査区の東側に緩やかに下がる落ちで、3層上面からの深さは約0.4mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粗粒砂混粘土で、近世の遺物が出土した。遺構の帰属時期は近世である。

## S O102

2・3C-E地区で検出した。S O101と同様、本来の検出面は第3層上面であり、遺構の規模や深さ等の詳細は不明である。調査区の西側に下がる落ちで、3層上面からの深さは約1.0mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粗粒砂混粘土、5Y4/4暗オリーブ色粗粒砂混粘土、10Y4/2オリーブ灰色粗粒砂混粘土、10BG5/1青灰色粗粒砂混粘土(5B6/1青灰色細粒砂混粘土のブロック混じる)、10BG6/1青灰色細粒砂混粘土(10YR4/6褐色粗粒砂混粘土のブロック混じる)、10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土、10YR6/6明褐色粗粒砂混粘土、10YR5/2灰黄色細粒シルト混粘土(5Y5/1灰色粘土のブロック混じる)で、古墳時代から近世の遺物が出土した。遺構の帰属時期は近世である。

## 第2面

T.P. +6.5m前後の7層上面で、古墳時代初頭から前期の土坑8基(S K201~208)、溝3条(S D201~203)を検出した。

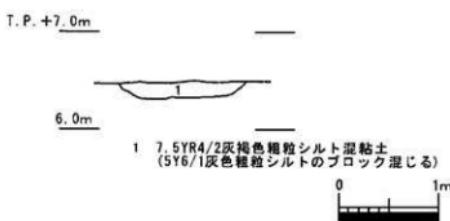
## 土坑(S K)

## S K201

2・3C地区で検出した。本遺構はS K202を切る。遺構の西側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は長方形で、長径1.4m、短径0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.05mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色粗粒シルト質粘土(10YR7/1灰白色粘土のブロック混じる)で、古式土師器の破片が出土した。

## S K202

2C地区で検出した。本遺構はS K201・203に切られる。検出した平面形状は東西方向に長い梢円形で、長径0.7m、短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.05mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色細粒シルト質粘土(10YR4/6褐色粗粒シルトのブロック混じる)で、古式土師器壺



第5図 S D101断面図 (S=1/50)

(7)の破片が出土した。7は庄内式壺で口縁部は外反し、端部はつまみ上げ面をもつ。生駒西麓産の土器である。

#### S K 203

2C地区で検出した。本遺構はS K 202を切り、S K 204に切られる。検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.85m、短径0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.05mを測る。埋土は7.5YR4/6褐色細粒砂混粘土(10YR6/1褐灰色細粒シルトのブロック混じる)で、古式土師器の破片が出土した。

#### S K 204

2C地区で検出した本遺構はS K 203を切る。検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径1.15m、短径0.95mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.08mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土(10YR6/1褐灰色細粒シルトのブロック混じる)で、古式土師器の破片が出土した。

#### S K 205

2B地区で検出した。本遺構はS K 206・207を切る。検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径1.55m、短径1.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.14mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒シルト質粘土(10YR6/2灰黄褐色細粒砂混粘土のブロック混じる)で、遺物の出土はなかった。

#### S K 206

2B地区で検出した。本遺構はS K 205・207に切られる。検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径1.0m、短径0.9mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色細粒シルト質粘土(10YR6/2灰黄褐色細粒砂混粘土のブロック混じる)で、遺物の出土はなかった。

#### S K 207

2B地区で検出した。本遺構はS K 205・208に切られ、S K 206を切る。検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径1.0m、短径0.85mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.12mを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄褐色細粒シルト質粘土(10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土のブロック混じる)で、遺物の出土はなかった。

#### S K 208

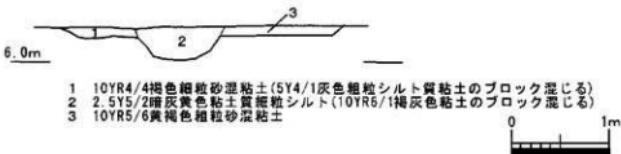
2B地区で検出した。本遺構はS K 207を切る。遺構の北側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は半円形で、検出部の長さは0.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色粗粒シルト混粘土(2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土のブロック混じる)で、遺物の出土はなかった。

#### 溝(S D)

#### S D 201

2F-G地区で検出した。遺構の南側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は南北方向に直線に伸びる。検出長6.0m、幅0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色細粒シルト質粘土(5YR4/8赤褐色粘土のブロック混じる)で、古式土師器壺(8~10)の破片が出土した。8は庄内式壺で口縁部は外反し、端部はつまみ上げ面をもつ。9は庄内式壺で口縁部は外反し、端部は欠損しており不明であるが、8と同様の形状になると思わ

T.P. +7.0m



第6図 S D 202断面図 (S=1/50)

れる。8と9は生駒西麓産の土器である。10は端部が丸く終わるV様式系の壺と思われる。

#### S D 202

2・3E・E、2F地区で検出した。遺構の東側と西側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は南東—北西方向に直線に伸びる。検出長10.0m、幅2.9mを測る。断面形状は、中央がくぼむ形で、深さ0.35mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土(5Y4/1灰色粗粒シルト質粘土のブロック混じる)、2.5Y5/2暗灰黄色粘土質粗粒シルト(10YR6/1褐色粘土のブロック混じる)、10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

#### S D 203

2C地区で検出した。遺構の東側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は東西方向に直線に伸びる。検出長2.0m、幅0.25mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粘土(10YR6/1褐色粗粒シルトのブロック混じる)で、古式土器の破片が出土した。

#### 第3面

T.P. +6.1m前後の9層上面で、弥生時代後期の溝1条(S D 301)を検出した。

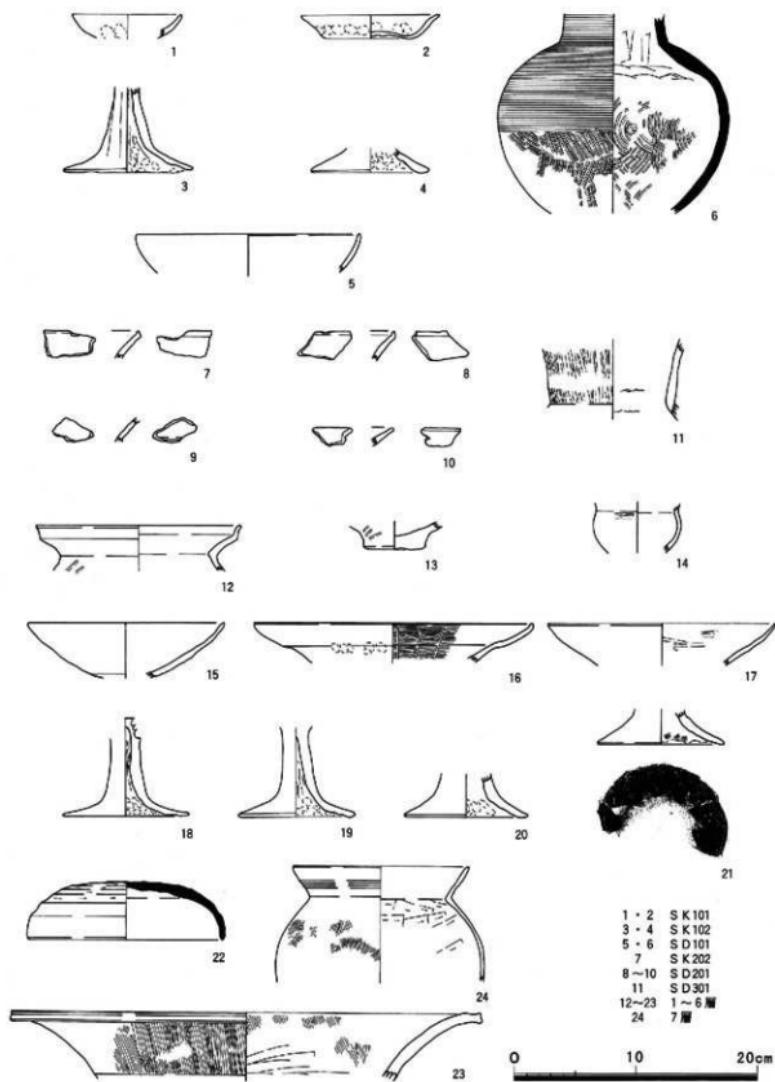
#### 溝(S D)

##### S D 301

2・3E・F、2G地区で検出した。遺構の南東側と北西側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した平面形状は南東—北西方向に直線に伸び、幅1.7~2.2mを測る。断面形状は、逆台形で、深さ0.7mを測る。埋土は上から7.5YR6/2灰褐色粘土質粗粒砂(7.5YR5/1褐色粘土のブロック混じる)、10YR5/6黄褐色粘土質粗粒砂(5Y5/1灰色粘土のブロック混じる)、5B3/1暗青灰色粘土と7.5Y6/1灰色粗粒シルトのラミナ(水成層)、5B3/1暗青灰色粘土(10YR4/4褐色粘土のブロック混じる)である。上層から弥生時代後期の壺(11)の破片が出土した。11は口縁部の破片で、端部は欠損している。内面はナデしており、粘土接合痕がある。外面は縦方向のミガキを施す。



第7図 S D 301断面図 (S=1/50)



第8図 出土遺物実測図 (S=1/4)

## 第2区

T.P. +6.4m前後の6層上面とT.P. +6.3m前後の7層上面で調査を行ったが遺構の検出および遺物の出土はなかった。

なお、本調査区の南側は、既設の建物工事の際に現地表下2.0m前後まで掘削されており、本来の地層は残ってなかった。

## 第3区

本調査区では、既設建物工事の際に現地表下2.3~2.4mまで掘削が行われており、本来の地層の堆積状況を確認することはできなかった。そのため、既設工事の土を機械で除去し、その下層に存在している本米の地層を確認することを目的とし調査を進めた。調査の結果、11層と12層を確認した。両層とも水成層の自然堆積であり、遺構の検出および遺物の出土はなかった。第1区の層序から11層と12層は弥生時代後期以前に比定される。

### 遺構に伴わない出土遺物

#### 第1~6層出土遺物

弥生土器(12・13)、古式土師器(14)、土師器(15~21)、須恵器(22)、埴輪(23)が出土した。

12は弥生時代後期の受け口状口縁壺で、体部外面は右上がりのタタキを施す。13は弥生時代後期の壺の底部である。外面に右上がりのタタキを施す。14は小形丸底土器の体部で、外面に横方向のミガキを施している。15は高杯の杯部で、内外面ナデを施す。16は高杯の杯部で、口縁部の途中に段をもつ。端部は上方につまみ上げ尖りぎみに丸く終わる。内面横方向のミガキ後放射状にミガキを施す。17は高杯の杯部で、端部は上方につまみ上げ尖りぎみに丸く終わる。内面横方向のミガキを施す。18~20は高杯の脚~裾部で、裾部内面には指頭圧痕がある。15~20は飛鳥時代に比定できる。21は高杯の裾部で、裾部内面には布目痕がある。22は須恵器杯蓋で、天井部外面向回転ケズリを施している。23は朝顔形埴輪の口縁部で、口縁は外反してひらく。口縁端部は上下につまみ出し、面をもつ。内面左上がりのハケ、外面縦方向のハケを施す。古墳時代中期に比定できる。

なお、これらの遺物は機械掘削終了後、壁面精査および側溝掘削時に出土したもので、出土した層の特定はできなかった。

#### 第7層出土遺物

古式土師器(24)が出土した。

24は布留式壺である。内湾気味に外上方へ伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ケズリ、外面ハケを施す。外面には煤が付着する。

### 3.まとめ

今回の調査では、近世、平安時代後期、飛鳥時代、古墳時代後期、古墳時代初頭から前期、弥生時代後期の遺構を検出した。

第1面では平安時代の土坑(S K101)や古墳時代後期の溝(S D101)を検出したことにより、同時期の遺構が広がっていることが判明した。

第2面では古墳時代初頭から前期の土坑(S K201~208)や溝(S D201~203)を検出した。同時期の遺構は、南に近接する第22次調査、東隣の第24次調査、北西側の38次調査でも確認していることから、今回の調査地も居住域であることが確認できた。

第3面で検出した弥生時代後期の溝(S D 301)は、南東から北西方向に直線に伸びる形状で、東隣の第24次調査では弥生時代後期の遺構を検出しており、東隣の第24次調査でも円筒埴輪が出土していることから、この溝を境に東側に居住城があると推測できそうである。

また、今回の調査地では古墳時代中期の埴輪の破片が僅かながら出土しており、東隣の第24次調査でも円筒埴輪が出土していることから、近隣に古墳が存在している可能性が高いと考えられる。

#### 参考文献

- ・米田敏幸 1981 「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』八尾市文化財調査報告6 昭和55年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・米田敏幸 1987 「東郷遺跡22次発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
- ・奥 和之 1989 「東郷遺跡発掘調査概要・I」一八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在一大阪府教育委員会
- ・青木勘時 1990 「5. 東郷遺跡(89-037)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1991 「第3章 第24次調査」『東郷遺跡—第23次・第24次発掘調査報告—』(財)八尾市文化財調査研究会報告29
- ・岡田清一 1992 「XI 東郷遺跡(第38次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1995 「3. 東郷遺跡(94-369)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・酒 斎 1995 「東郷窯跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課
- ・岡田清一 1995 「III 東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1997 「13. 東郷遺跡(95-153)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

# 図版



調査地周辺(北東から)



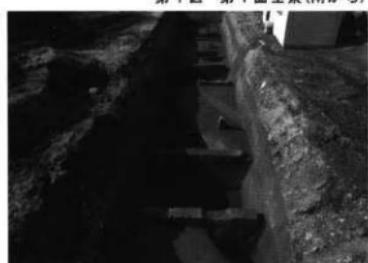
第1区 挖削状況(南東から)



第1区 第1面全景(南から)



第1区 第2面全景(南から)



第1区 第3面全景(南から)



第1区 SD202(南東から)



第2区 第1面全景(南から)



第2区 第2面全景(南から)



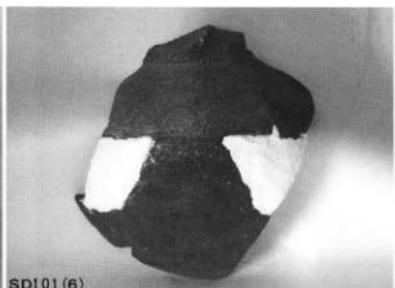
第3区 全景(南から)



第3区 挖削状況(北から)



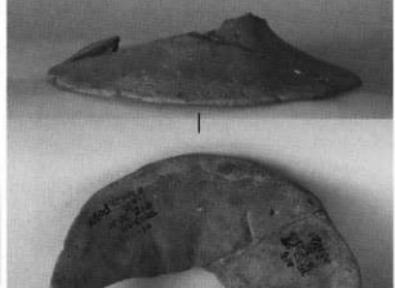
SK102 (3)



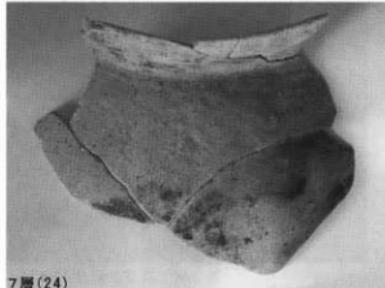
SD101 (6)



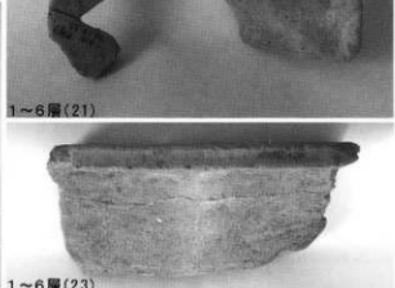
SD301 (11)



1~6層 (21)



7層 (24)



1~6層 (23)

IV 東郷遺跡第62次調査（T G 2003-62）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘1丁目25番で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第62次調査(TG2003-62)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年12月15日～平成16年1月15日(実働16日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約438m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は岩本順子・國津れいこ・鈴木裕治・都築聰子・中野靖之(現福井県教育委員会嘱託)である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。

【遺物実測】曹 龍・徳谷尚子

【遺物トレース】徳谷

【執筆・編集】西村

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	43
2.調査概要.....	43
1) 調査の方法と経過.....	43
2) 層序.....	44
3) 検出遺構と出土遺物.....	45
3.まとめ.....	52

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	43
第2図 地区割図.....	44
第3図 地層断面図.....	44
第4図 第1・2区平面図.....	46
第5図 S K105～108平面図.....	47
第6図 S K110～112平面図.....	48
第7図 S K113・114・117平面図.....	49
第8図 S E101平面図 .....	52
第9図 出土遺物実測図.....	53

## 図 版 目 次

図版一 調査地周辺 第1区全景 第2区全景 第1区SK102~108検出状況 第1区 SK  
107検出状況 第1区 SE101検出状況 第1区 SK107出土遺物 第1区 第1  
層出土遺物

## IV 東郷遺跡第62次調査(T G 2003-62)

### 1. はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央から北よりに位置し、現在の行政区画では本町1・7丁目、東本町1～5丁目、北本町2丁目、莊内町1～2丁目、桜ヶ丘1～4丁目、光町1～2丁目、旭ヶ丘1丁目の一部がその範囲になっている。地形的には長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置している。

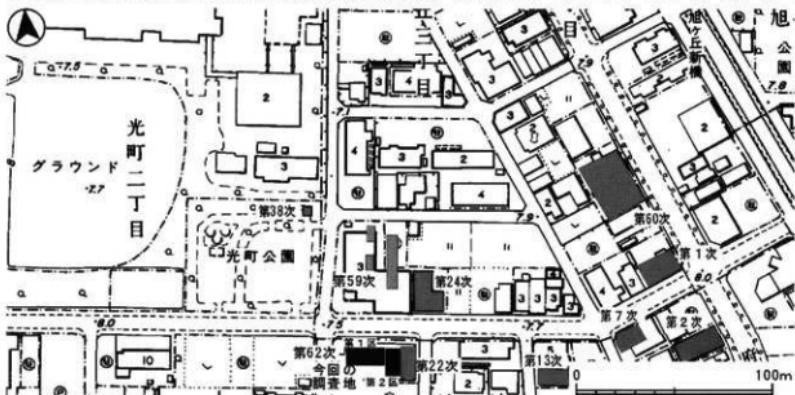
当遺跡では、大阪府教育委員会(以下府教委)および八尾市教育委員会(以下市教委)ならびに財團法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近代に至る遺構の検出および遺物の出土が確認されている。

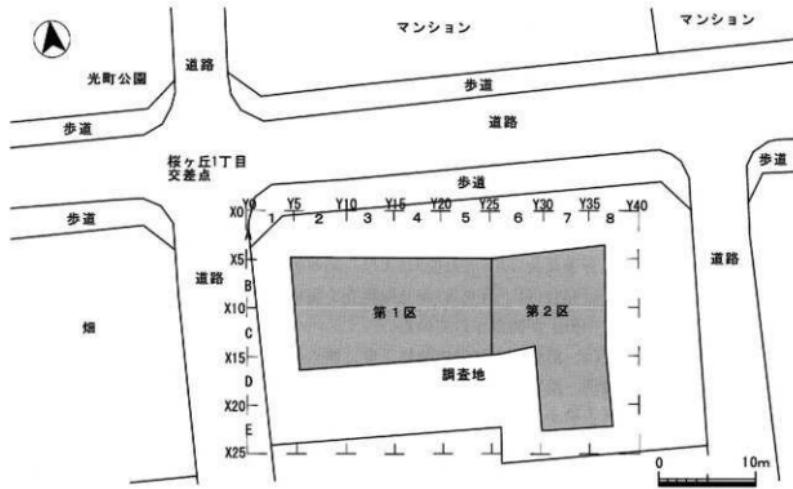
今回の調査地の周辺では、府教委が楠根川改修工事に伴う発掘調査を行っており、弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。中でも特筆すべき遺物には古墳時代の特殊器台があり、この器台は吉備からの搬入品である可能性があると考えられている(奥1989)。市教委では第1次調査を行っており平安時代前期の井戸を検出している(米田1981)。また、第22次調査では、古墳時代前期の建物遺構や溝・落ち込みが検出されている(米田1987)。研究会では第24次調査をおこなっており、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代中期・鎌倉時代・近世の遺構が検出されている(高萩1991)。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、研究会が東郷遺跡内で行った第62次調査にあたる。調査は、掘削した残土を調査地内に置く都合から、西側と東側に分けて行った。西側を第1区、東側を第2区とする。地区割は、調査地を覆う南北25m、東西40mの範囲に任意で設定した。区割りは、調査地の北側と西側の境界にあわせ、北西隅を任意の基準点とし、5m毎に南へアルファベット(A～E)、東へ



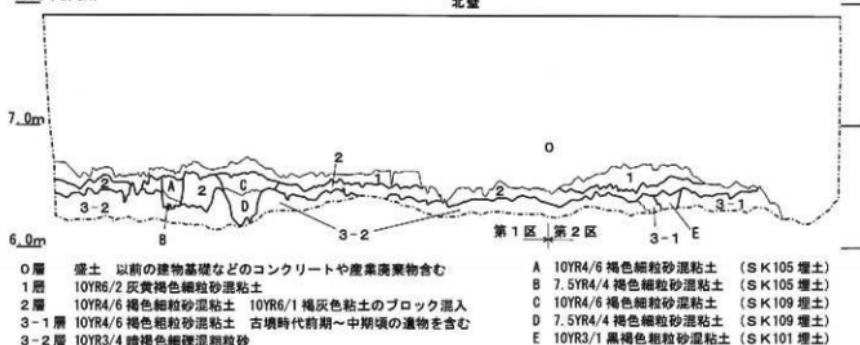


第2図 地区割図 ( $S=1/500$ )

アラビア数字(1～8)を付けた。地区名は、各地区を1A～8E区と呼称する。地区割の北西隅にはX0、Y0を設け、その地点から南にX0～X25、東にY0～Y40を設定し、X・Yの交点を地点の名称とした。調査にあたっては、現地表下約1.5mを機械で掘削し、以下約0.3mの厚みの地層は人力で掘削し構造および遺物の検出に努めた。なお第2区東側の東西幅約6mの部分は、既設建物工事の際、地表下2.0m以上の掘削が行われており、地層の堆積は確認できなかった。

## 2) 層序

0層は盛土。以前の建物基礎などのコンクリートや産業廃棄物を含む。1層は10YR6/2灰黄褐色細粒砂混粘土。2層は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、10YR6/1褐色粘土のブロックが混入し、  
T.P.+8.0m 北壁



第3図 地層断面図 (垂直1/40 水平1/200)

上面は土壌化している。飛鳥時代および平安時代～鎌倉時代の遺構を検出した。3・1層は10YR4/6褐色粗粒砂混粘土で、古墳時代前期～中期の遺物を含む。3・2層は10YR3/4暗褐色細粒砂混粘土である。上面で古墳時代前期の遺構を検出した。

### 3) 検出遺構と出土遺物

3・1・3・2層上面で古墳時代前期の土坑1基(S K101)を検出した。また、2層上面で飛鳥時代の土坑1基(S K102)、平安時代～鎌倉時代の土坑20基(S K103～122)、溝2条(S D101・102)を検出した。さらに1層上面で近世の井戸(S E101)を検出した。

#### 土坑(S K)

##### S K101

6・7B地区で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため遺構の形状は不明である。検出した南北幅0.9m、東西幅1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で古式土師器(1)の破片が出土した。1は布留式壺の口縁部で、端部は内傾する面をもつ。内外面ともにヨコナデ。

##### S K102

2B地区で検出した土坑で、平面形状は東西方向に長い楕円形で長径0.6m、短径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.25mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、5YR6/2灰褐色粘土で土師器等(2)の破片が出土した。2は高杯の裾部で、「ハ」の字にひらく。内面に指圧痕がある。7世紀初頭に比定できる。

##### S K103

2B地区で検出した。S D101を切る。平面形状は長い楕円形で、長径0.9m、短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器等の破片が出土した。

##### S K104

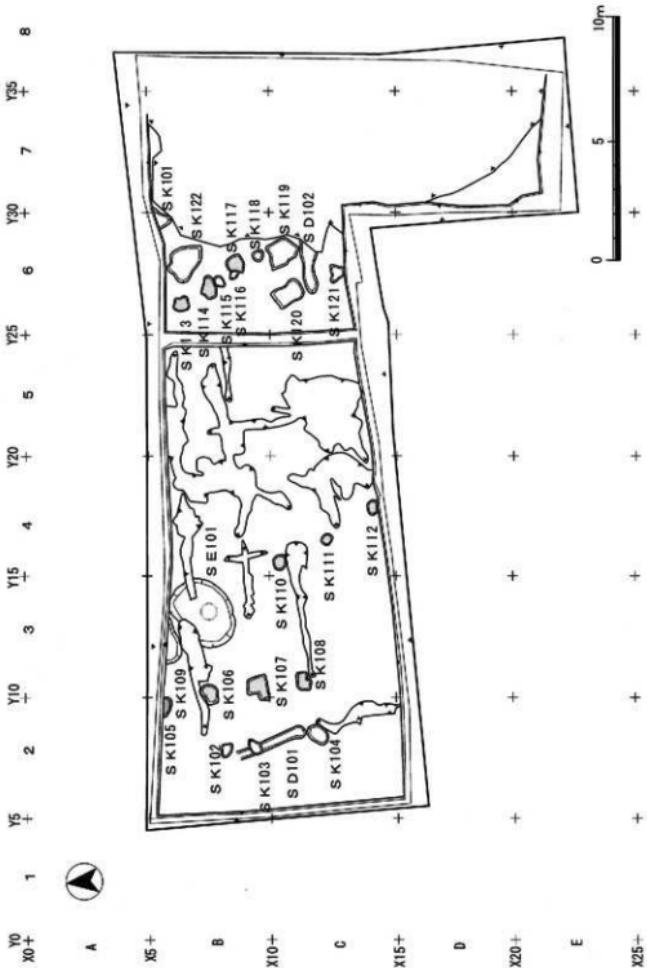
2C地区で検出した。平面形状は長い楕円形で、長径1.0m、短径0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、5YR6/2灰褐色粘土で土師器、須恵器の破片が出土した。

##### S K105

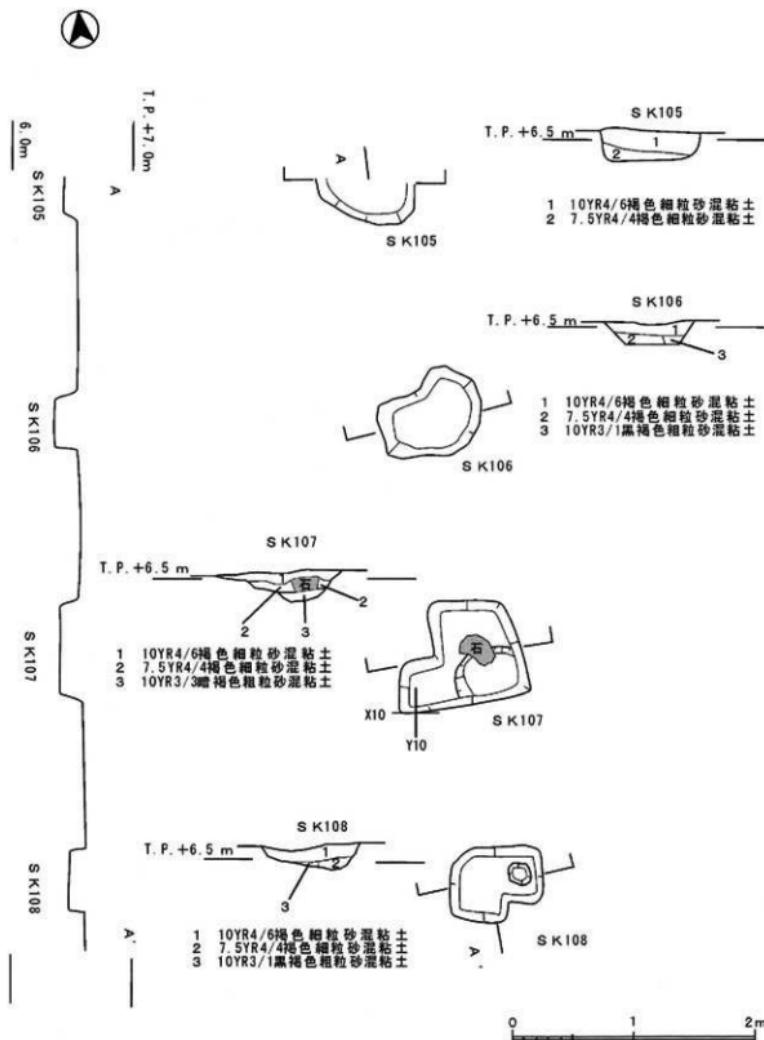
2・3B地区で検出した。遺構の北側が調査区外にいたるため遺構の全容は不明である。検出した東西幅は0.8m、南北幅は0.6m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は上から10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器、瓦器等(3)の破片が出土した。3は瓦器椀の口縁で、内外面ヨコナデを施す。鎌倉時代に比定できる。

##### S K106

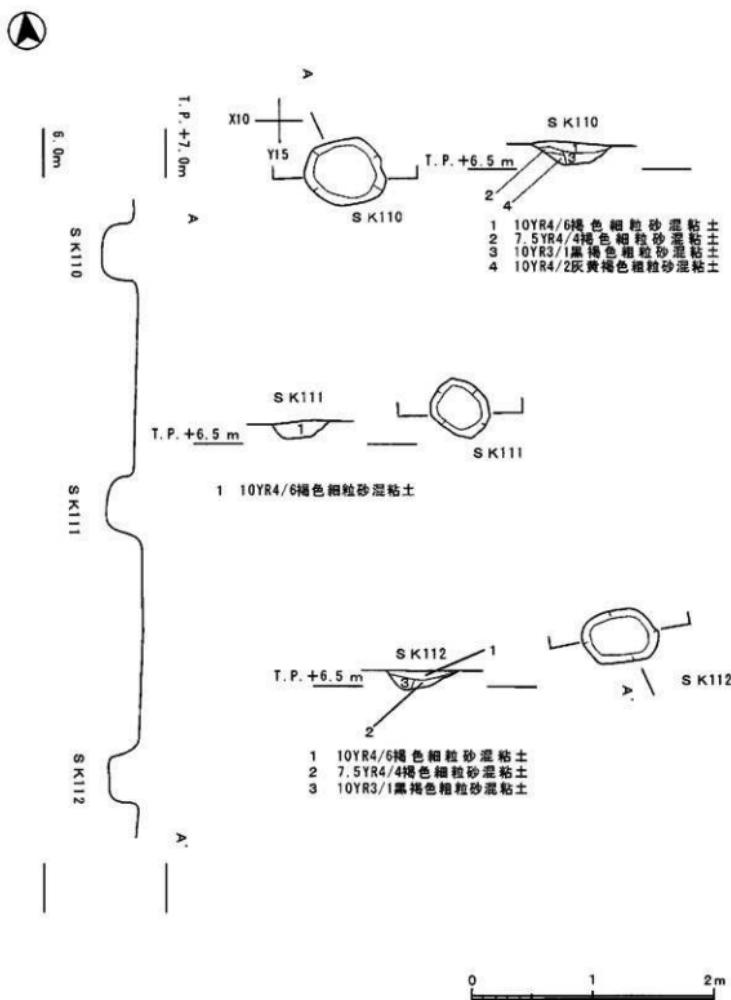
2・3B地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.9m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器、須恵器等(4・5)の破片が出土した。4・5は土師器皿の口縁部で、内外面ヨコナデを施す。鎌倉時代頃かと思われる。



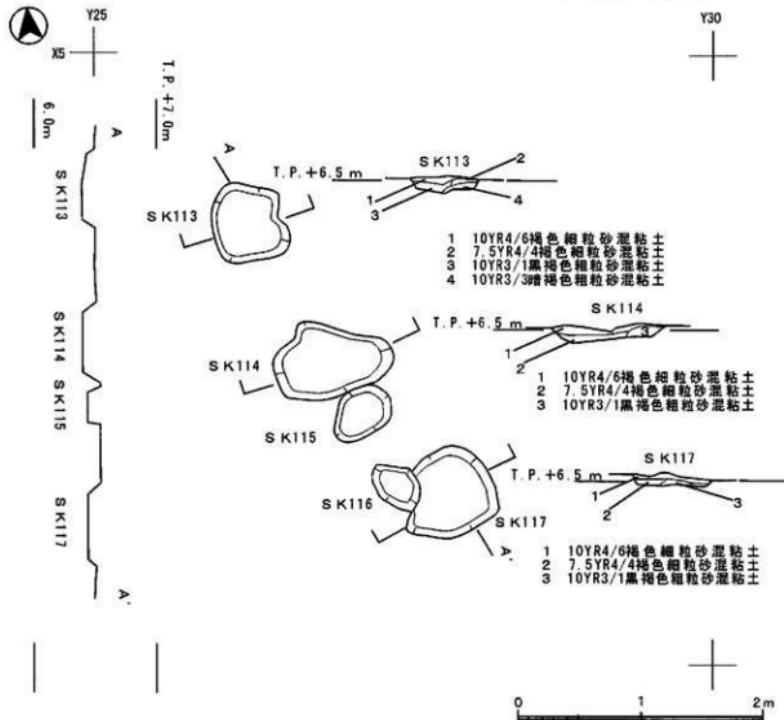
第4図 第1・2区平面図 ( $S=1/200$ )



第5図 SK105~108平面面図 (S=1/40)



第6図 SK110~112平断面図 (S=1/40)



第7図 SK113・114・117平面面図 (S=1/40)

**S K107**

2-3B地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.9mを測る。断面形状は逆台形で、南東側が一段深くなる。深さ0.25mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、5YR6/2灰褐色粘土、10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土で土師器、須恵器の破片が出土した。また、遺構の底には柱を置いたと思われる根石(6)が据えられていた。6は平らな面を2面もち一部に煤が付着している。

**S K108**

3C地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.8m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、東側が深くくぼむ。深さ0.15mを測る。埋土10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器、須恵器等(7・8)の破片が出土した。7・8は土師器皿で、口縁部は折れ曲がり、端部は尖って終わる。内外面ナデ。

**S K109**

3B地区で検出した。遺構の北側が調査区外にいたるため遺構の全容は不明である。検出した東

西幅は2.0m、南北幅は0.9mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は上から10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器の破片が出土した。

#### S K 110

4C地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.7m、短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土、10YR4/2灰黄褐色粗粒砂混粘土で土師器(9)の破片が出土した。9は土師器皿で、口縁端部は内側につまみ出し丸く終わる。内外面ヨコナデ。内面放射状ミガキを施す。

#### S K 111

4C地区で検出した。平面形状は円形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

#### S K 112

4C地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.6m、短径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

#### S K 113

6B地区で検出した。平面形状は南北方向に長い不定形で、長径0.7m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土、10YR3/3暗褐色粗粒砂混粘土で土師器、瓦器の破片が出土した。

#### S K 114

6B地区で検出した。S K 115に切られる。平面形状は東西方向に長い不定形で、長径1.0m、短径0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

#### S K 115

6B地区で検出した。S K 114を切る。平面形状は円形で、径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器等(10)の破片が出土した。10は須恵器杯蓋の口縁部である。口縁端部は内傾する段をもつ。内外面回転ナデを施す。

#### S K 116

6B地区で検出した。S K 117を切る。平面形状は円形で、径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器の破片が出土した。

#### S K 117

6B地区で検出した。S K 116に切られる。平面形状は東西方向に長い不定形で、長径0.7m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器、瓦質土器の破片が出土した。

**S K 118**

6B地区で検出した。平面形状は不定形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.25mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

**S K 119**

6B・C地区で検出した。平面形状は南北方向に長い不定形で、長径1.4m、短径1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器(11)の破片が出土した。11は壺と思われる底部で、中央がくぼむ上げ底を呈す。内外面ナデを施す。

**S K 120**

6C地区で検出した。平面形状は南北方向に長い開丸の長方形で、長径1.3m、短径0.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器、須恵器、瓦器等(12・13)の破片が出土した。12は土師器鍋の把手と思われる。内外面ナデを施す。13は土師器杯で、内外面ヨコナデを施す。

**S K 121**

6C地区で検出した。平面形状は東西向に長い不定形で、長径0.8m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

**S K 122**

6B地区で検出した。平面形状は南北向に長い不定形で、長径1.6m、短径1.2mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

**溝(S D)****S D 101**

2B・C地区で検出した溝で、S K 103に切られている。検出した平面形状は南北へ伸びる溝で、幅0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR2/3黒褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

**S D 102**

6C地区で検出した。遺構の東側は以前の建物基礎で切られている。検出した平面形状は東西方向に直線に伸びる。検出長1.8m、幅0.5mを測る。断面形状は、逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土 10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土で土師器、須恵器、瓦器等(14・15)の破片が出土した。14は須恵器杯身で、内外面回転ナデを施す。15は須恵器杯蓋で、内外面回転ナデを施す。

**井戸(S E)****S E 101**

3B地区で検出した近世の井戸である。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径2.9m、短径2.5mを測る。断面形状および深さは、砂層からの湧水が激しく、遺構の底までの掘削が不可能

となつたため、不明である。井戸側は上から3段確認した。掘形の埋土は上から5Y5/1灰色粗粒砂混粘土、2.5Y4/1黄灰色細粒砂混粘土、10YR4/6褐色細緻混粘土、10YR4/1褐灰色粗粒シルト混粘土、10YR5/8黄褐色粗粒砂である。井戸側内は上から5B5/1青灰色細粒シルト混粘土、5B3/1暗青灰色粗粒砂混粘土である。掘形内からは土師器、瓦器、近世陶磁器・瓦等の破片が少量出土した。

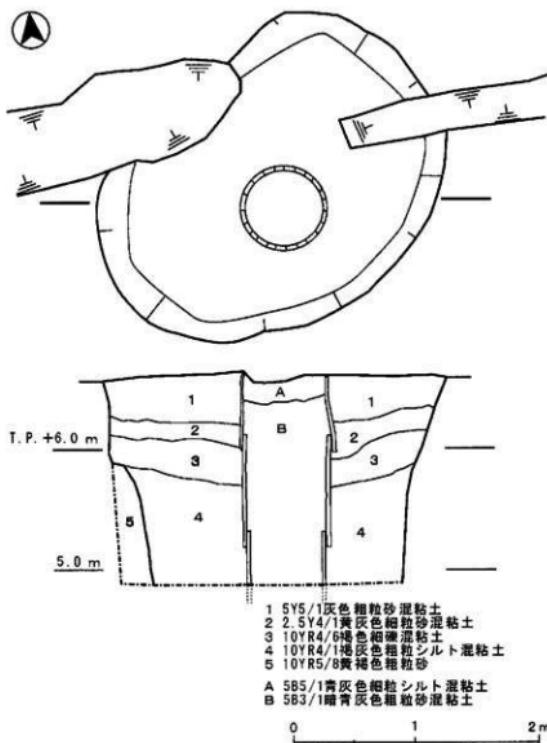
#### 遺構に伴わない出土遺物

第1区の第1層からは古式土師器等(16)の破片が、第2層からは土師器等(17)の破片が、第3~2層からは古式土師器等(18~19)の破片が出土した。16は複合口縁壺で、口縁端部に面をもつ。外面ヨコナデを施す。17は土師器壺で、外反する口縁部をもち、端部は丸く終わる。口縁部内面ハケナデ、外面ヨコナデを施す。体部内面横方向のハケナデ、外面縱方向のハケナデを施す。18は壺の底部で、底部は突出する。内面ハケナデ、外面ミガキを施す。19は庄内式壺である。口縁部は外反し、端部はつまみ上げ、面をもつ。外面ヨコナデを施す。

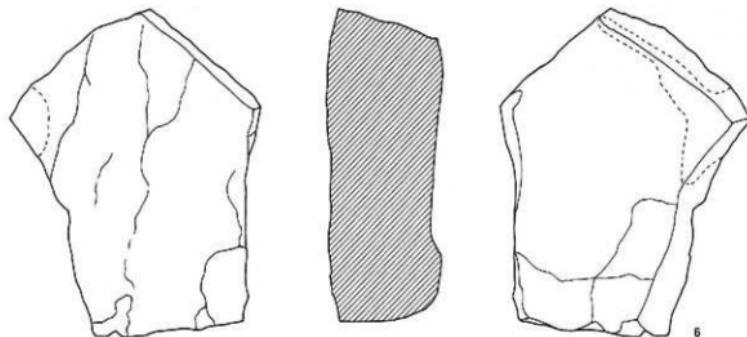
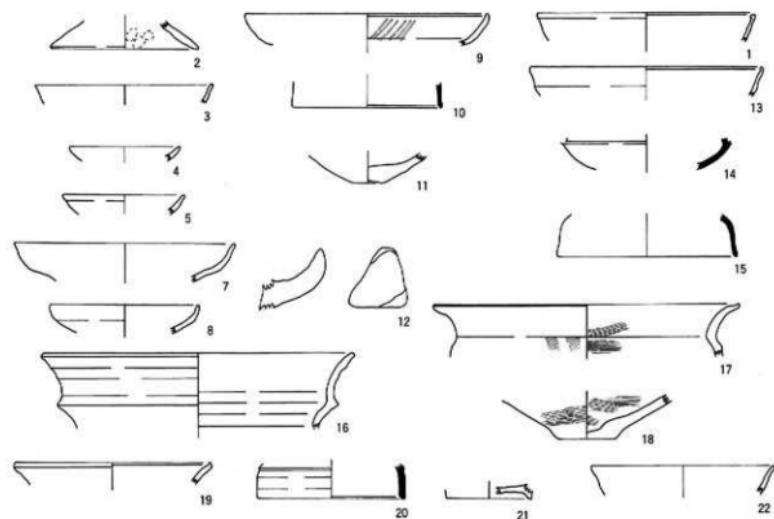
第2区の第1層からは須恵器等(20)の破片が、第3~2層からは黒色土器、瓦器等(21~22)の破片が出土した。20は須恵器杯蓋である。口縁部外面には稜があり、口縁端部は内傾する凹面をもつ。外面回転ナデを施す。21は黒色土器椀で、表面は内外面ともに黒い。「ハ」の字に開く高台が貼り付き、外面ナデを施す。22は瓦器椀である。内溝する体部からやや外反する口縁部で、端部は尖り気味に丸く終わる。外面ともに表部磨耗し調整不明である。

#### 3.まとめ

今回の調査では、近世、平安時代から鎌倉時代、飛鳥時代、古墳時代前期の遺構を検出した。なかでも、2層上面で検出した平安時代から鎌倉時代の土坑(S K 105~108・110~114・117)は、



第8図 S E 101平面断面図 (S=1/40)



1 2 3 4 - 5	S K101 S K102 S K105 S K106	6 7 · 8 9 10	S K107 S K108 S K110 S K115	11 12 · 13 14 · 15 16	S K119 S K120 SD102 第1区第1層	17 18 · 19 20 21 · 22	第1区第2層 第2区第3-2層 第2区第1層 第2区第3-2層
						0 10 20cm	

第9図 出土遺物実測図 (S=1/4)

南北方向と南西から北東方向に並んで検出していることから、掘立柱建物などの施設が建てられていた可能性が高いと考えられる。しかし、今回の調査地での建物の復元はできなかった。

また、3-1層上面で検出した古墳時代前期の遺構は、東側の第22次調査や北東側の第24次調査でも確認していることから、西側に同時期の遺構が広がっていることが明らかになった。

#### 参考文献

- ・米田敏幸 1981 「東郷遺跡発掘調査概要」「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」八尾市文化財調査報告 6 昭和55年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・米田敏幸 1987 「東郷遺跡22次発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
- ・奥 和之 1989 「東郷遺跡発掘調査概要・I」一八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在一大阪府教育委員会
- ・青木勘時 1990 「5. 東郷遺跡(89-037)の調査」「八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1991 「第3章 第24次調査」「東郷遺跡－第23次・第24次発掘調査報告－」(財)八尾市文化財調査研究会報告29
- ・岡田清一 1992 「II 東郷遺跡(第38次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1995 「3. 東郷遺跡(94-369)の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・道 素 1995 「東郷庵寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要7」八尾市教育委員会文化財課
- ・岡田清一 1995 「III 東郷遺跡(第45次調査)」「東郷遺跡 財團法人八尾市文化財調査研究会報告48」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1997 「13. 東郷遺跡(95-153)の調査」「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 2004 「27 東郷遺跡(2003-315)の調査」「八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告49 平成15年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

# 図版



調査地周辺(東から)



第1区 全景(東から)



第2区 全景(北から)



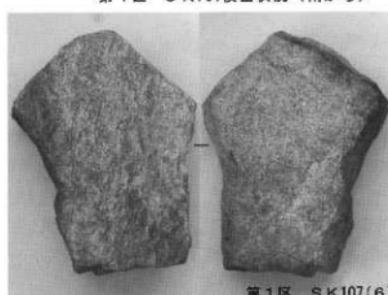
第1区 SK102~108検出状況(南から)



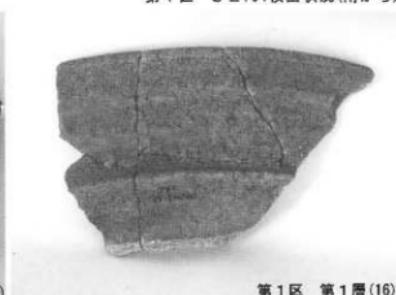
第1区 SK107検出状況(南から)



第1区 SE101検出状況(南から)



第1区 SK107(6)



第1区 第1層(16)

## 報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんぼうじん やおしぶんかざいちょうさげんきゅうかいほうこく90
副書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告90
I 成法寺遺跡（第13次調査） II 成法寺遺跡（第15次調査） III 東郷遺跡（第59次調査） IV 東郷遺跡（第62次調査）	
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	90
編集者名	西村公助
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	測定面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因	
じょうほうじゅせき 成法寺遺跡 (第13次調査)	おおたかみやおしゃれいじゆうじゆじゆうじゆうめ 大阪府八尾市南本町3丁目	27212	73	343709	1353630	19940404 ～ 0418	210	社会福祉施設
じょうほうじゅせき 成法寺遺跡 (第15次調査)	おおたかみやおしゃれいじゆうじゆじゆうじゆうめ 大阪府八尾市南本町3丁目	27212	73	343710	1353630	19950405 ～ 0425	425	社会福祉施設
とうごうりゆせき 東郷遺跡 (第59次調査)	おおたかみやおしゃれいじゆうじゆじゆうじゆうめ 大阪府八尾市桜ヶ丘3丁目	27212	37	343740	1353637	20030421 ～ 0512	250	立体駐車場
とうごうりゆせき 東郷遺跡 (第62次調査)	おおたかみやおしゃれいじゆうじゆじゆうじゆうめ 大阪府八尾市桜ヶ丘1丁目	27212	37	343738	1353636	20031215 ～ 20040115	438	共同住宅

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
成法寺遺跡 (第13次調査)	集落	鎌倉時代～室町時代	井戸 土坑 溝	土師器・瓦器	
成法寺遺跡 (第15次調査)	集落	鎌倉時代～室町時代	井戸 土坑 溝	土師器・瓦器	
東郷遺跡 (第59次調査)	集落	弥生時代後期・古墳時代初期～前期・古墳時代後期・飛鳥時代・平安時代後期・近世	土坑・溝・落ち込み	弥生上器・古式土師器・土師器・須恵器・瓦器	
東郷遺跡 (第62次調査)	集落	古墳時代前期・飛鳥時代・平安時代後期～鎌倉時代・近世	土坑・溝・井戸	古式土師器・土師器・須恵器・瓦器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告90

- I 成法寺遺跡 (第13次調査)
- II 成法寺遺跡 (第15次調査)
- III 東郷遺跡 (第59次調査)
- IV 東郷遺跡 (第62次調査)

発行  
編集 平成18年3月  
財団法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 倍近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 ニューエイジ <110Kg>

001